

わが国における各種の家事労働と、 ILO189号条約・201号勧告との関係

小 西 國 友

I はじめに

- (1) わが国においては、家内労働という概念とこれに類似する家事労働という概念とが存在し、これに伴って家内労働者という概念と家事労働者という概念も存在する。このうちの家内労働ないし家内労働者に関しては、すでに昭和45年法律60号として「家内労働法」が制定され、有害な家内労働が規制されるとともに家内労働者が法的に保護されることになった。そして、このような事情はドイツ（西ドイツ）でも類似し、1951年3月14日に家内労働法（Heimarbeitsgesetz）が制定され、家内労働者（Heimarbeiter）が主として低賃金と労働災害から保護されることになった。
- (2) 家事労働を「日常的な家庭生活を営むために必要な各種の労務の提供」と概念規定し、このような労務の提供をする主体を家事労働者と概念規定するならば、かかる家事労働者は平成の現代においてきわめて多数が存在している。そして、この意味での家事労働者はつとに律令時代に存在したことは言うまでもなく、それに先行する縄文時代や弥生時代においても存在したといえることができる。しかし、中国大陸や朝鮮半島からの影響を受けて制定された往時における律や令の中において、かかる家事労働ないし家事労働者に関して定める法令は存在しなかったといって大過ない。そして、将来的に見ても、わが国において家事労働ないし家事労働者に関する法制度が整備されるのは困難ではないかと予想されるのである。
- (3) このことに関連して条約などの国際法令に目を転じてみると、2011年に開催されたILO第100回総会において「家事労働者条約」(Domestic

Workers Convention) が採択された。この第100回総会は、ILO が1919年に設立されアメリカのワシントンで第1回総会が開催されてからちょうど100回目にあたるエポック・メイキングな総会であり、家事労働者条約はこれを記念する意味をも込めて採択されたものである。

この記念すべき条約は、1条1項(b)号において「『家事労働者』とは、雇用関係の下において家事労働に従事する者をいう」と概念規定した。このような概念に該当する家事労働者は今日の世界において約5300万人ぐらいいるだろうと推計されている。しかし、この条約を批准する国はあまりなく、ILO 総会で採択された約1年後の2012年6月14日に至って、ようやくウルグアイが最初の批准国として批准したのである。

ウルグアイという国は南アメリカに位置する人口約350万人の発展途上国であるが、今後において他の発展途上国がこの条約を批准することは十分に予想されている。しかし、先進諸国がこの記念すべき条約を批准することは数少ないであろうと言われている。本稿は、わが国における家事労働者の現状とその沿革を考察するとともに、このエポック・メイキングな189号条約の内容を概観しかつ検討することを主たる目的にするものである。

II 各地の生活様式と、人々の役割の多様性

1 農業就事と防人の兵役制度

- (1) (ア) 時代が奈良時代に入る以前の白鳳時代において、わが国には公的な兵役制度としての防人制度が存在した。この制度は律令制度の一部であり、その内容は根拠法である律や令が変更されることに伴って幾度か変遷したが、基本的には21歳以上60歳未満の男性を徴用し、九州北部や対馬・壱岐などに兵士（防人）として派遣するというものであった。

この当時のわが国はすでに農耕時代にあり、農耕に従事する労働力も不可欠であったところから、成人の男子（正丁）の全員を防人として徴用することは不可能であったので、正丁の3人に1人ないし4人に1人が防人

として徴用・派遣されたといわれている⁽¹⁾。ところが、律令制度の変遷に伴い、それまでは広く諸国の正丁から防人を徴用していたが、西暦730年の頃からは「東国」の正丁からのみ防人を徴用するようになった。

その理由の1つは、対馬・壱岐・北九州その他の地域の正丁よりも東国の正丁の方が肉体的に勝っていたからであると想像されている。また、他の1つは、防人による対馬・壱岐・北九州地方の防衛は、この地方を唐と新羅が武力で攻撃して来るのではないかと、という大和朝廷の不安に基づくものであり、武蔵国や相模国などの東国には唐と新羅の連合軍により滅ぼされた高句麗からの渡来人の子孫が多く居住し、これらの者を防人として使用することが精神的にも感情的にも適している、との大和朝廷の判断があったからではないかと想像されている。

(イ) 古代における東国としては、奈良時代にあつては近畿以東の諸国が意味されたが、平安時代以降では現在の関東地方以東の諸国が意味されたと言われている。いずれの用語法によっても陸奥をはじめ信濃・甲斐・武蔵・相模などの諸国が含まれることになるが、防人がこれらの地域から北九州方面へ移動することは大変な危険を伴いまた労力も要したところから、防人として徴用されたのは東国といっても常陸国と武蔵国と相模国の正丁が中心になったのではないかと想像されている。

もとより、信濃国も東国の1つであるから、信濃国の正丁も信濃国からの防人として兵役に徴用されている。その際に、後述するように、各地の豪族が組織する「軍団」に参加して移動したと考えられており、この移動にあたっては地方政府の官人である「部領使」(ことりづかい。ぶりょうしとも読む)が引率者として参加したとされる。しかし、部領使が傷病に罹患するなどして引率しえない場合には、中央政府(大和朝廷)の地方官である「国造」(くにのみやつこ)が引率することもあったとされる。

たとえば、信濃国の防人の移動にあたり、信濃国の官人が部領使として引率すべきところ、病気のために信濃國小県郡(ちいさがたこおり。現在の長野県上田市付近)の国造である「他田舎人大島」(おさだのとねり・

おおしま) が引率した場合などである。この時に引率者である他田舎人大島の詠んだ歌が「からころむ 裾に取り付き泣く子らを、置きてそ来ぬや母(おも) なしにして」という有名な防人歌である⁽²⁾。

(ウ) 防人として兵役に従事する正丁は個人こじんで移動するのではなく、危険と労力とを軽減するために各地における豪族が結成し運営する「軍団」に加入し、その長(おさ)の指揮・命令の下に九州北部などに移動したと考えられている。このことを常陸や武蔵・相模の国々からの防人として兵役(軍役)に従事する者について見れば、相模国の相原氏が結成し運営する「相原軍団」に加入したと言われている⁽³⁾。

相原軍団の拠点は現在の地名でいえば東京都町田市相原町(あいはらまち)にあったとされるが、かつての地名でいえば相模国高座郡座間郷(ざまごう)にあったとされる。この座間郷の中央を貫流する河川として高座川(こうざがわ)という川があったが、徳川家康が1590年に江戸城(太田道灌が築城し、小田原の北条一族が拡張した江戸城)に入城した直後の1591年に検地を実施し、この高座川を境川(さかいがわ。境の川)と名称変更して、境川の西側(京都に近い部分)を相模国とし東側の部分を武蔵国としたと言われている⁽⁴⁾。

かかる経緯によって二分された相原郷(あいはらごう)のうちのどちらの部分に、かつての相原軍団の中心拠点が存在したのかは必ずしも明らかではないが、おそらく現在の町田街道(都県道としての47号線)の北側に位置する東京都町田市相原町の区域にあったと想像されている。その理由の1つが、軍事に関する神を奉る諏訪神社(相原諏訪神社。長野県の諏訪地方にある諏訪神社の末社の1つ)が47号線の北側に所在するとともに⁽⁵⁾、奈良・平安時代からの軍事上の幹線道路の1つであった「古代東海道」も近くを通っていたと考えられるからである⁽⁶⁾。

(エ) 高座川(境川)から北方に約2キロメートル離れたところを流れる中小河川に、恩田川(おんだがわ)と呼ばれる川がある。恩田川の水源が何処であるのかは道路が舗装された現在では明らかでないが、町田市の中

心部からさほど遠くない薬師池（やくしいけ。或いは、やくしがいけ）の付近ではないかと推定されている。薬子池は多摩川水系の自然湧水を利用した池であり、雨量の多い少ないには関係なく水量が一定している池である⁽⁷⁾。また、この薬子池から南南方向に約2キロメートルほど離れたところには玉川池（たまがわいけ）と奈良池（ならいけ）もあり、これらの池も多摩川の伏流水による池と考えられている。

このような多摩川の伏流水による湧水池として古くから知られるものに東京都武蔵野市にある善福寺池（これは第2次湧水池）があり、また、文京区の小石川後楽園内の心字池があり、同じく文京区の東京大学構内の心字池（いわゆる三四郎の池。これらは第3次湧水池）がある。これらは、多摩川による扇状地の扇の要にあたる東京都青梅市付近で伏流水（ふくりゅうすい）になった多摩川の水が土地の高低に応じて地上に流出して出来た湧水池であるが、第1次湧水池としては東京都東大和市の村山貯水池（現在の名称は多摩湖）がある⁽⁸⁾。

そして、多摩川の伏流水が、湧水池になるのではなく湧水群になることもある。その1つが東京都の「東村山市」（武蔵村山市の東方）に隣接する「東久留米市」にある湧水群であり、市内を貫流する落合川と黒目川には湧水群で湧出した水が大量に流れ込んでおり、湧水群の1つである「南沢湧水群」では1日の湧水量が1万トンにもなるという。これらの川のうちの1つである落合川は、平成20年に環境省が定めた「平成の名水百選」にも指定されたものである⁽⁹⁾。

- (2) (ア) 「自然湧水」（単に湧水という）とは地中から地上に自然に湧き出る水のことであり、このような湧水を永続的に貯えた場所が自然湧水池であって、その規模の大きなものが自然湧水湖である。たとえば、前述した村山貯水池であり、これは多摩川の伏流水を貯水した規模の大きな池であり、後に人工的に堤防とダムとが建設されて現在では「多摩湖」と呼ばれている。これは東京都に大量の水道用水を供給しているが、これだけでは東京都民の水道用水を賄うことができず、荒川水系の水や利根川水系の水

や相模川水系の水も水道用水として利用されている。

村山貯水池（多摩湖）の水は多摩川の伏流水が自然に地上に湧出したものであるが、地域によっては伏流水ではなく「地下水」が地上または地上近くに湧出することもある。たとえば、長野県の中部地方にある諏訪湖の場合である。諏訪湖は天龍川の水源であり、諏訪湖には四方から複数の中小河川（31本あるともいわれる）の流水が流れ込んでおり⁽¹⁰⁾、諏訪湖はフォッサ・マグナ断層の窪地（凹凸地）の一部にこれらの河川の水が貯水されて形成された断層湖の1つであると考えられてきた。

ところが、最近になり、諏訪湖の湖底に高性能の水中カメラを沈め湖底の状況を正確に撮影したところ、湖底の複数箇所で大量の地下水の湧出していることが確認されたのである。また、同様の地下水の湧出は、同じく水中カメラでの撮影により、滋賀県の中央部分にある琵琶湖においても確認されたという。琵琶湖も断層湖であり、淀川の水源にもなっているが、琵琶湖の場合にも四方から流入する中小河川がかなりあるとされている⁽¹¹⁾。

(イ) 長野県に所在する有名な池湖沼として⁽¹²⁾、諏訪湖のほかに上高地の「大正池」がある。大正池は、大正4年に飛驒山脈の南部に位置する「焼岳」が噴火したことにより、梓川の上流部分が堰き止められて形成された堰塞湖（せきそくこ）であり、「池」とは呼ばれているが一般的には湖の一種に分類されている。この上高地は松本盆地（広義には安曇野と呼ばれる）の西部の山岳地帯に位置するが、東部は梓川の扇状地であって平坦地である。そして、この東部の平坦地の部分は狭義に安曇野と呼ばれている。この地域においては梓川の伏流水が各地で湧出しており、これを利用してワサビ栽培が行われている。

梓川の伏流水は松本市の市街地においても自然湧水しており、市街地の随所たとえば松本城の付近などで井戸が存在するとともに、街路の側溝（排水側溝）にも多量で清冽な水が排水として流れている。このような自然湧水の結果として、松本市では市中において日本酒の醸造工場がいくつ

も存在しており、また、味噌の醸造工場も存在している。これに対して、長野県における著名な銘酒である「大雪溪」は白馬山麓の自然湧水を使用しており、諏訪市の「真澄」は諏訪湖周辺における霧ヶ峰からの自然湧水を使用している。

(ウ) ところが、梓川の伏流水に関する異変ではなく、梓川の堰塞湖である大正池に異変が発生したのである。それは、大正池への土砂の流入のために年々この池の湖底が浅くなって水量が減り、そのため下流に水力発電所を所有する東京電力が自己負担で浚渫（しゅんせつ）してきたが、平成23年3月11日の東電福島第1原子力発電所の事故による経営悪化のために浚渫費用（年額約1億5000万円）の負担が困難になり、「〔大正池は〕浚渫をやめれば、6～7年で消失する」という惧れが生じてきたということなのである。

そして、このことに関連して、来年には80周年を迎える上高地帝国ホテルの総支配人が「何世代にもわたって、大正池を楽しみに来る観光客も多い。北アルプスの山々や梓川、大正池などの上高地の魅力。そのどれもが欠けてはならない」と話したというのである。これに対して、東京電力松本電力所地球・環境グループのマネージャーは「工事の中止や縮小は一切考えていない」と述べたという⁽¹³⁾。

- (3) (ア) 長野県内に水源をもつ有名な河川としては、上述した梓川のほかに奈良井川がある。梓川の水源は日本アルプスの「槍ヶ岳」にあり河川の全長は約65キロメートルであるのに対して、奈良井川の水源は中央アルプス（木曽山脈）にあり河川の全長は約56.3キロメートルである。前者の梓川の場合には扇状地（扇状地の扇の要は島々の付近）の伏流水（東京都の多摩川の扇状地の扇の要は青梅市の付近）の利用によりワサビの栽培がなされており、これは農業の一種である。

これに対して、後者の奈良井川の場合には洗馬（せば。狭い場の意味）の付近が扇状地の扇の要にあたると考えられるが、梓川に比較して奈良井川の扇状地はあまり発達していない。したがって、奈良井川の下流におい

て自然湧水を利用したワサビの栽培は顕著には見られないが、奈良井川の流水は松本市と塩尻市の水道用水として使用されており、その一部には伏流水も含まれていると考えられている⁽¹⁴⁾。

(イ) 長野県内に水源を有する河川として、梓川と奈良井川と並んで女鳥羽川（めとばがわ）もある。この女鳥羽川は江戸時代の初期ごろは「女堂田川」（めとうだかわ）と呼ばれていたという。水源は三才山峠（みさやまとうげ）にあり、川の全長は約20キロメートルに過ぎない。松本市と塩尻市の水道用水は基本的には奈良井川の流水によっているので、女鳥羽川の流水は水道上水としては使用されていない。

女鳥羽川は江戸時代には松本城の外堀の役割をも担っていたといわれ（内堀の用水は梓川の伏流水によっていると思われる）、また、水運の水路の役割をも担っていたとされる。これは、女鳥羽川が松本の中心部を貫流しながら、犀川（さいがわ）と合流し信濃川になって日本海にまで通じているからである。しかし、明治35年に篠ノ井線（中央東線の塩尻駅から信越本線の篠ノ井駅までの路線）が開通した後は、旅客や荷物の輸送は水路によることなく陸路によることになったのである⁽¹⁵⁾。

河川の役割の観点からすると、女鳥羽川の今日的役割は軽微なものになったが、今日においても川底の浚渫工事に止まらず護岸の美化工事も積極的行われている。これは、松本市長をはじめとする松本市の行政機関の見解によるとともに、松本市民の希望によるものでもあるといわれている。そして、かつての鶴林堂（かくりんどう）書店付近の女鳥羽川には数匹の鯉が放流されている⁽¹⁶⁾。このような由来のある女鳥羽川が現在でも信州大学旭キャンパスの東側をほぼ真南に向かって流れている。

- (4) (ア) 学校法人・玉川学園（この法人の経営する大学が玉川大学）の校地の一部にある玉川池（たまがわいけ）は湧水池であるが、同じく多摩川の伏流水の湧水池と見られる池が校地内の約1キロメートルほど隔った場所にある。この後者の池は「奈良池」（ならいけ）と呼ばれており、この奈良池の周辺を水源とする奈良川が東に向かって流出している。この奈良川は

川崎市麻生区（あせおく）の奈良町（ならまち）を貫流した後に恩田川（おんだがわ）と合流し、さらに鶴見川とも合流して横浜港に流入している。

奈良川は全長が約4キロメートルほどの小河川であるが、これが貫流している奈良町はゆるやかな平坦地であり、これに隣接する横浜市青葉区もゆるやかな平地である。そして、これらを併せると奈良川流域はかなり広い平地になり、かつては広い水田地帯であったところである。現在では流域の上部の丘陵地帯には奈良団地や奈良北団地（ならきただんち）やその他の団地が存在しているが、これらの地域を除く奈良川の下流域は水田地帯であったところである。

(イ) 恩田川は以前は原町田村と町田村とを貫流する部分が「町田川」と呼ばれ、恩田村を貫流する部分とその下流が「恩田川」と呼ばれていたが、今日では水源付近から町田市の中心部を貫流する部分をも含めて、川の全体が恩田川と呼ばれている。この川は平行して流れる鶴見川と JR 横浜線の中山駅付近で合流し鶴見川の一支流になるが、河川の管轄官庁（管理官庁）が国土交通大臣であるところから、ともに2級河川ではなく1級河川に指定されている⁽¹⁷⁾。

恩田川という川名は「恩田村」を貫流していることに由来する名前であるが、そもそも恩田村という村名の由来は必ずしも明らかではない。この地域は遠く飛鳥時代からの水耕地帯であり、恩田村周辺も水量の豊富な水田地帯であったと考えられている。しかし、なぜ「恵まれた田」というイメージの「恩田」という地名が付いたのかは明らかではない。かえって、この下流地帯は平坦ではあるが川の左右の一部が丘陵地帯になっており、水耕は可能であるが日当たりが良くない水田地帯であるところから、「恩田」という地名が付いたのではないかと想像されている⁽¹⁸⁾。

(ウ) 学校法人・玉川学園の校地内にある奈良池も、この付近を水源とする奈良川も、川が貫流する奈良村（現在の地名は川崎市麻生区奈良町）も、飛鳥時代に続く奈良時代にはすでに存在しており、当時から奈良や京都と

の関係が深かったと考えられている。そして、大化改新の以後における律令法制の一環としての「班田収受法」によって、6歳以上の男女（良男と良女）に口分伝（くぶんでん）が分ち与えられることになったのに基づき奈良川流域の人々にも口分田が付与されることになったと考えられている。これらの人々の中に地域の豪族（豪農）である引田（ひきだ、或いは、ひけた）氏の一族がいたと言われている⁽¹⁹⁾。

2 水稻耕作と班田収受

- (1) (ア) 引田一族は土地の有力者であったが、遅くとも奈良時代に先行する飛鳥時代にはこの地に居を構えており、班田収受法の施行される以前から、自ら或いは良民や賤民などの労働力を利用して山野を開墾し田畑を所有していたとされている⁽²⁰⁾。この班田収受法は、良民などに付与（受け渡すこと）しその利用に供する法であったが、付与された良民などが死亡した際には朝廷に返還（収めること）することを原則とするものであり、土地の有力者である引田一族もその例外ではなかったと想像される。しかし、引田氏は遅くとも飛鳥時代ごろから代々この地域に居住していたと言われ、既述したように良民や賤民などを使用して広大な土地を開墾して来たのであり、班田収受法の施行前においてすでにそれを私有していたと考えられるのである⁽²¹⁾。

奈良村周辺の集落がどの位の期間にわたり存続したかは不明であるが、長野県千曲市に所在する屋代遺跡は、弥生時代に集落が造営され、9世紀後半には条里区画も完成したとされている地区である。ところが、仁和4年（888年）の大洪水によりこの集落は消滅したのである。したがって、弥生時代が紀元3世紀ごろまで続いたとすると、この集落は約600年以上にわたって存続していたことになる⁽²²⁾。

これは、千曲川の大洪水という稀有な自然災害に原因して消滅した集落の一例であるが、東京都八王子市（八王子市は多摩丘陵の西北部に位置する）の中田遺跡の集落の場合には、すでに古墳時代には形成されており、奈良時代にも住居が建築されるなどして引き続き存在していたところ、十

世紀以後になると人々の住んだ形跡がきわめて稀薄になったというのである⁽²³⁾。したがって、古墳時代が6世紀ごろまで続いたとすると、この集落も約400年以上にわたって存続したことになる。

(イ) 奈良川流域の集落の有力者であった引田一族がいつの時代まで存在したかは正確には不明とされるが、この奈良川は長野県の千曲川のような大河川ではないから、洪水により河川が氾濫したとしても、その流域の氾濫原に造営されていた集落が一挙に消滅するということは考え難い。そして、現在においても、かつての奈良川の水田地帯は近代化された住宅地として存続しており、部分的には水田も存在しているのである。しかし、引田一族は平安時代ごろまでは土地の有力者として存在したと考えられるが、その後の鎌倉時代に武士が国家権力を掌握するにつれて権威を喪失していったと想像されている。

(ウ) 良民にせよ賤民にせよ、人々が山野を開墾して田畑を造営する場合には、人々は可能であれば畑地としてでなく田地として使用ししかも水稻耕作をしたいと希望するものである。このような思考形態は古代においても近代においても基本的には変りがないといつてよい。そして、相模国の馬入川（ばにゅうがわ。相模川のこと）等の流域に居住していた古代人も、流域の丘陵地帯では畑地として耕作し麻その他の植物を栽培するが、氾濫原の低地地域では田地として水稻を栽培していたと考えられる。

このようなことは同じく相模国の奈良川流域においても同様であり、流域の丘陵地帯では麻の栽培が行われ、低地地域では水稻の栽培が行われていたのである。そして、この奈良川流域の丘陵地帯は、多摩丘陵（ローム層の地層と、砂層の地層から成り立っている）の一部であり、相模国多摩郷麻生村（たまごう・あせおむら）とこれに隣接する柿生村（かきおむら）も多摩丘陵の一部であって、前者の麻生村地域では既述したように「麻」の栽培が行われ、後者の柿生地域では「柿」の栽培が行われ、これらのことがそれぞれの地名の由来になったのである。

柿は、わが国では自生していたとともに、古くから食用として栽培され

てきたものであり、これは穀類の栽培ではないが食用植物の栽培として農業の一種であったとすることができる⁽²⁴⁾。このような柿のほかに、自生の食用植物としてはブドウ（山ブドウ）があり、これは栽培されることはなかったが食用植物として食用に供されていたとすることができる。今日のわが国においてもブドウ（葡萄）が食用に供されているが、これは中国から伝来したものといわれ、中国において果実が大きい品種に改良されたものが山梨県などで栽培されるようになったもの（甲州葡萄と呼ばれる）といわれている。

しかし、古来からわが国においても自生の山ブドウは存在していたのであり、縄文時代の人々は山ブドウを食し、山ブドウからブドウ酒を醸造し飲んでいたといわれている。このことは単なる憶測にすぎないものではなく、かなり客観的に根拠があるものとして次のように述べられている。「長野県の縄文時代の井戸尻〔いどじり〕遺跡からは底にヤマブドウの種がくつついた土器が発見された。有孔罎〔ゆうこうつば〕付き土器といわれるもので、土器の首に罎のような底がついていて、そこに孔があいている。この土器にヤマブドウを仕込んで果実酒をつくっていたといわれている」と⁽²⁵⁾。

わが国の自生のブドウではなく外国伝来のブドウの一種としてデラウェアがある。これは甘味の濃い小粒のブドウであるが、これと同じ位の大きさの外国伝来の食用植物としてブルーベリー（blueberry 主として北アメリカからの伝来植物）がある。これは赤紫色のデラウェアと相違して濃青色で甘酸っぱい味の小果実であるが、ここ数年の間にわが国の各地で食用植物として栽培されるようになった。これも農業の一種であるといことができる。

ブルーベリーは水はけの適度に良い地層に向いているといわれ、東京都では主として八王子市（17ヘクタール）・町田市（11ヘクタール）・日野市（10ヘクタール）などの多摩丘陵地帯で栽培されている。そして、全国的には、栽培面積が1番多い県は長野県であり、2位は群馬県であり3位は

埼玉県で4位は茨城県であるとされる。これらの栽培地では摘取り式の栽培農園もあり、摘取り方式による場合には収穫の際の人件費がかからないというメリットがあるという⁽²⁶⁾。

(二) 武蔵七党筆頭の横山氏の一族である相原氏が支配していた武蔵国相原郷は既述したように相原軍団の拠点であったが、大地沢（おおちさわ）を水源とする高座川がこの地を貫流していたところから、古代から水稻耕作も行われていたと考えられている。他方で、原地（はらち）も多く馬の牧畜も盛んであったと言われている。何よりも、東国から古代東海道の軍用道路を利用して西方へ軍勢を移動させるのに多くの良馬が必要であったことによるものであり、また、大和朝廷に租税の一種である「調」として良馬を献上する必要性もあったからであるとされている。

しかし、このような相原の地域に居住する人々の中には、牧草地である草原を開墾し水路をも造営して水耕地帯に作り代えたいという強い願望が永いことあったと言われている。そして、時代が奈良時代から下って中世の鎌倉時代を過ぎ、さらに近世の大正時代を経て昭和も20数年を経た頃に、地域住民の有志が時の政府に水田のための用水の開削の嘆願書を提出し、それから数年が経過した昭和30年に許可が決定されて補助金も支給されることになり、前述した諏訪神社（相原諏訪神社）の所在する丸山地区に水田が出現するに至ったのである⁽²⁷⁾。

3 武士階級の台頭と、水稻以外の雑穀の栽培

- (1) (ア) 相原氏や引田氏が有力な豪族や豪農として武蔵国と相模国に存在した平安時代が終り、相模国の鎌倉の地に幕府が開設された以降において、各地から鎌倉に通ずる街道は総称して「鎌倉街道」と呼ばれるようになった。このような鎌倉街道の中には、奈良時代においてすでに存在していた群街道（ぐんかいどう。群政府が管理していた公道）の一部を利用して造営された「古道」と、鎌倉時代になって新たに造営された「新道」があった。前者の一例として「鎌倉街道上ノ道」や「鎌倉街道山ノ道」があり、後者の一例としては「鎌倉街道早ノ道」があった⁽²⁸⁾。

この新道である「鎌倉街道早ノ道」は武蔵国の国府が置かれていた「府中」を通過し、ほぼ真南に向って南下し、軍事拠点の1つである「長津田」を経由した後に、鎌倉に隣接する藤沢にまで至る道路である。藤沢は清浄光寺の門前町であるとともに東海道五十三次の宿場町でもある。この新道は「鎌倉街道早ノ道」という名称からも容易に想像しうるように、府中から藤沢に向けて南下する直線の道路である。そして、この軍事上重要な「早ノ道」がその中間地点において奈良川流域を通過することになったのである。

この「早ノ道」の開通によって、奈良川流域の水田地帯がすべて消滅したとは考え難い。だが、「早ノ道」は鎌倉幕府にとって重要な軍事道路であったから、その管理は幕府の信頼しうる荘園主（荘園領主）ないし有力な地頭に担当させることになったと考えられる。少なくとも国司や郡司が管理したとは考え難い。そして、一般的には、この管理者は高座郡渋谷荘の荘園主である渋谷氏であったと推定されている⁽²⁹⁾。このようにして、水稻耕作の大きな担い手であった引田氏は鎌倉時代にその有力な地位をほとんど喪失したと考えられるのである。

(イ) 古代において、東国の人々の中には防人としての兵役に従事する者もいたが、稲作文化が広く東国にまで及んだ後においては多くの人々が水稻耕作に従事した。防人として兵役に従事した者は正丁である男性に限られていたが、水稻耕作に従事する者の中には男性のみならず女性も含まれていたといつてよい。しかし、水稻耕作だけでは家族全体の食料を確保することが困難であり、男女により粟や稗などの穀類（雑穀）も栽培され、米と粟・稗などの全体が人々の主食になったと考えられている。

この当時において水稻耕作により収穫される米は、今日でいう「うるち米」（粳米）であって粘り気が少なかったといわれている。その調理方法としては、水と共に煮る即ち炊く方法が一般的であったが、「かまど」（竈）の上に土器製の鍋を置き、さらにその上に蒸器である「こしき」（甑）を置いて「もち米」（餅米）をも調理したとされる。かかる調理方法

が可能になったのは5世紀に朝鮮半島から竈が伝来したことによるものである⁽³⁰⁾。

(ウ) 粟や稗は雑穀であるから稲に比べれば手間がかからないが、それでも穀類であるからそれなりに手間がかかり、山野を開墾したにも拘わらず土地がなお硬い場合には大豆などの豆類を先に栽培し、豆の根の力によって土地を柔らかくする方法もあった。しかし、「豆を植えて稗を得る」という諺は、期待はずれであったことを意味する諺である。

古代になる以前の縄文時代における豆類としてよく知られるものに「ツルマメ」と呼ばれるものがある。わが国でも自生し、小型の豆果をつける豆である。かつては発見されることが数少なかったが、現在では縄文土器の底部の圧痕から推認する方法（レプリカ法）によって「ツルマメ」とであると判定される事例が増加しつつあると言われる。

その一例が宮崎県都城市の王子山遺跡から発掘された縄文土器の圧痕であり、都城市教育委員会は平成24年3月26日には王子山遺跡から約1万3000年前の「ツルマメ」の圧痕を発見したと発表した。この「ツルマメ」は大豆の原種といわれている植物であり、山梨県韭崎市の妻夫石（めおといし）遺跡でも発見されている⁽³¹⁾。

- (2) (ア) 縄文時代においては、これらの雑穀や豆類のみならず、柿や麻などの植物も栽培されていたといわれる。柿は古代からわが国に自生していた植物であり、すでに古代にあって栽培されていたと考えられているが、麻は中央アジア原産でありわが国では自生していなかった植物とされている。しかし、すでに古くわが国に伝播し、古代においても栽培され衣料の原料にされていたといわれている⁽³²⁾。

麻のほかに蕎麦（そば）も中央アジア原産でありわが国には自生していなかったが、麻に類似してすでに古くからわが国に伝播し栽培されていた。その時期が何時ごろかに関する定説はないが、稲作文化がわが国に伝来するよりも以前であったことは間違いないとされている。蕎麦の伝来よりも稲の伝来の方が時期的に早かったとすれば、蕎麦の栽培が人々の間で積極

的にされることは少なかったと考えられるからである。そして、1つの有力な考え方によれば、蕎麦は縄文時代にはすでに中国大陆あるいは朝鮮半島からわが国に伝来していたとされている⁽³³⁾。

(イ) 鎌倉時代においては既述したように馬が軍事上重要な役割をもってしたが、農民にとっても重要な意味をもっていた。それは馬が「畜力」として農耕に使用され、水田や畑地の耕作が容易になり、農産物の生産量が飛躍的に増加した（2倍以上ともいわれる）からである。それでもなお平安時代におけると同様に、農民の主食は米のみならず雑穀からも成り立っており、粟や稗なども常食されていたと考えられるが、農業経営にとって牛馬は決定的に重要な役割を担ったのである。

そして、時代が下り、室町時代・江戸時代を経て明治時代になってもこのような事情に大きな変化はなく、これが決定的に変化したのは昭和時代の中頃（第2次大戦の終了後）に畜力に代って動力が一般的に普及したことによるものである。かかる動力の代表的なものがディーゼル・エンジンによるものであり、ディーゼル・エンジンを搭載した農作機械（トラクターなど）が普及したことによるものである。たとえば、山岡内燃機製作所が製造したトラクターである。このような山岡内燃機が製造したトラクターは燃費が良い上に故障が少なかったのである⁽³⁴⁾。

4 生業としての農業と、生業としての漁業との関連性

- (1) (ア) 人々の古くからの「生業」としては農業のほかには漁業がある。農業としては稲や粟・稗・蕎麦などの雑穀や柿・栗・ワサビなどの食用植物の栽培があり、このほかに麻・綿・桑などの非食用植物の栽培などがある。「生業」とは人が家庭生活を営むための基礎になる各種の仕事（事業）のことであり、古くは「なりわい」と呼ばれていたものである⁽³⁵⁾。このような生業のうちの代表的なものである農業と漁業とは概念的には明らかに別個のものであるが、現実的にはこの2種類の生業は密接な関連性を有するものである。

また、農業と養蚕業もそれぞれ別個の生業であるが、後述するように、

桑畑において栽培される桑の葉により養蚕業が営まれるところからこの2つの生業も密接に関連するものであり、また、牛や馬の畜産業も、田畑の耕作にあたり牛馬が畜力として利用されるところから、これらも密接に関連するものである。すでに古く縄文時代において粟・稗・蕎麦などの雑穀を栽培する農業が行われていたとされるが、牛馬とくに馬の畜産が行われるようになったのは弥生時代以降の時期のことである⁽³⁶⁾。

(イ) 農業と漁業との関連性について、農業として行われる稲作のうちの「水稻耕作」に例を取れば、水田におけるドジョウやタニシの飼育などは農業との関連性が顕著に認められるものの一つである。ドジョウ（泥鰌。土長とも表記する）は雄よりも雌の方が大きく、小川や池沼に自生するものもあるが、水田で飼育されるものもあり、このようなドジョウは特に「タドジョウ」と呼ばれる⁽³⁷⁾。タニシ（田螺。ニシとは各種の巻貝のこと）には「オオタニシ」や「ヒメタニシ」などの大小さまざまなものがあり池沼に自生することが多いが、水田において飼育されることもある。

また、水田用貯水池では鯉（こい）や鮒（ふな）などの飼育されることもある。鯉（中国では鯉魚ともいう）は世界的に分布し自生する野生種（野生種。ノゴイという）もあり⁽³⁸⁾、わが国では古くからノゴイを捕獲して池沼で飼育し食用に供していたとされる。そして、長野県佐久市における鯉の養殖は信濃国に稲作文化（水稻文化）が伝来した当時から水田用貯水池などで飼育したことの発展した形態であるといわれている⁽³⁹⁾。

(ウ) 古代のわが国における魚介類の捕獲は内陸の河川や湖沼などで行われたのみならず、海洋でも行われたと考えられる。その一例が「マグロ」（古名ではシビという）やイルカ（小型のクジラのこと。クジラの古名はイサナで勇ましい魚の意味）であり⁽⁴⁰⁾、アワビやハマグリなどである。これらのうちのマグロは世界的に生息している魚であり（イルカも世界的に生息している）、日本近海ではクロマグロ（本マグロ）やビンナガマグロ（ビン長マグロともいう）が生息している。このほかに良く知られるマグロに南マグロ（南半球の海洋に生息するマグロ。インドマグロもこの一

種である）がある。

そして、アワビにもマダカアワビ（真高鮑）やエゾアワビ（蝦夷鮑）などがある。マダカアワビは房総半島以南の沿岸地域に生息し、アワビの中では殻が最も長く、しかも、美味であるところから珍重されている。このマダカアワビ（俗にマアワビとも呼ばれる）は朝鮮半島の沿岸海域にも生息すると言われる。また、エゾアワビは北海道の沿岸海域に生息するが殻の長さがそれほど長くなく味も劣るところから、さほど珍重はされていない。オーストラリア産のアワビ（オーストアワビ）は殻の長さはマダカアワビと大差ないが味は劣るとされている。

(ㄥ) 弥生文化が伝播する以前の東国は、水稻耕作の技術がなく生活は貧しかったというイメージが強い。しかし、東国に畿内から水稻耕作の技術が伝播しなかったということは、東国において稲作が全く行われていなかったことを意味するものではなく、別個のルートたとえば朝鮮半島北部から日本海を横断するルートなどによって、稲粳とそれを栽培する技術とが当時の東国に伝播した可能性がなかったわけではないと考えられる⁽⁴¹⁾。

また、東国や北海道の沿岸地域は水温が低いために多量のサケの生息地帯であったと考えられ、同様にこの地域の河川の水温も低かったことにより、たとえば越後国の信濃川では多量のサケが産卵のために河川を遡上し、サケの捕獲が容易であったのである。このことは、信濃国の領域内における信濃川においても、また、その支流である犀川（さいがわ）においても同様であったと考えられている⁽⁴²⁾。

このほかに、サケと同様にサケ目に属する魚にシシャモがある。これも産卵のために河川を遡上するところから、北海道においてはその沿岸海域で捕獲しようとするとともに、十勝川や石狩川などの内陸河川においても捕獲しえたと考えられる。したがって、信濃国をはじめとする越後国やその他の縄文時代における東国は、想像以上に裕福であったのであり、弥生時代以降においても同様であったのである。

(2) (㍑) わが国の縄文時代における住居跡からは様々な食物の遺物が発掘さ

れている。その中心的なものはクルミやドングリなどの食物の種子であるが、マグロやイワナなどの魚類の食物の遺物もあり、ハマグリやアワビなどの貝類の遺物もあるという⁽⁴³⁾。クリ（ドングリも同様）は食物の種子であって丸いやや大きめの物を意味する言葉であり、ハマグリも貝類（介類）ではあるが海浜に生息する丸いやや大きめの物（アサリは一般的にそれほど大きくない）であることに由来する言葉である。

これらの魚介類の遺物は全国的に存在するが、長野県の松本盆地は古代の縄文時代から現代に至るまで海岸に面していたことはないのであるから、松本盆地の縄文遺跡からこれらのものが発見されることはきわめて稀である⁽⁴⁴⁾。かりにこれらの食物の遺物が松本盆地の縄文遺跡から発見されたと仮定すれば、それは駿河国が面する駿河湾で捕獲され或いは越後国が面する日本海で捕獲され松本盆地まで移送された食物の遺物であると考えられることになる。

(イ) 江戸時代において、駿河湾で捕獲されたアワビが木樽に入れて醤油漬けにされたまま甲斐国に移送され、それが甲府（甲斐国の国府の所在地）周辺において調理され「煮貝」（にがい）という名称で好んで食されたという歴史的事実がある。このような料理は平成の現代においても高級料理として甲府地方において食されているが、江戸時代においては醤油づけアワビよりもランクが低い塩漬アワビや乾アワビも駿河国から甲斐国にもたらされている⁽⁴⁵⁾。

アワビは、既述したように、産地の相違によってマダカアワビやエゾアワビやオーストアワビなどに分類されるが、アワビはこのほかに身の縁（ふち）の色の違いによっても分類される。第1に、身の縁の色が黒色ないし濃青色である場合には「黒アワビ」と呼ばれ、このような黒色や濃青色でない場合には広く「赤アワビ」（縁が、別段、赤い色であるわけではない）と呼ばれる。そして、駿河湾に生息するアワビは「赤アワビ」が多いとされている。

(ウ) 駿河湾で捕獲されるアワビはこのような分類からして多くは「赤ア

ワビ」(黒アワビでないアワビのこと)であることになるが、駿河国から甲斐国への移送ルートは一般的には富士川それ自体ではなく富士川に沿う「富士川街道」(現在の国道52号線)であったといわれている。そして、この街道は、駿河国で生産された食塩が甲斐国に移送された街道でもあり、古くは「塩ノ道」とも呼ばれたといわれる⁽⁴⁶⁾。

しかも、食塩や塩漬アワビや乾アワビは、木樽に入れた醤油漬けアワビよりも軽いところから、さらに「甲州街道」(現在の国道20号線)を利用し、諏訪を経由して塩尻まで移送されたといわれており、この街道も駿河国から甲斐国までのルートと併せて「塩ノ道」と呼ばれている。このようにして太平洋側からの「塩ノ道」の終点は信濃国の塩尻になり、また、日本海からの「塩ノ道」の終点も同様に塩尻であることになったのである⁽⁴⁷⁾。

5 農業と畜産業との関連性

- (1) (ア) 古代の信濃国においては、農業や漁業のほかに畜産業も盛んであったとされている。この畜産については牛の畜産のほかに馬の畜産もあったが、わが国における畜産としては牛の飼育による畜産の方が馬の飼育によるそれよりも時期的に早かったと想像されている。これは馬の大陸からの渡来が紀元5世紀頃のことであり、それ以前にわが国での馬の飼育がそもそもありえなかったからである⁽⁴⁸⁾。

この馬の飼育の方法には大別して2種類のものがあつた。第1は草原において馬を放牧して行うものであり、第2は放牧を行うとともに冬の雪の多い季節などには建物(馬屋。厩とも表記する)を利用して行うものである。このような建物としては独立した馬屋のこともあれば、東北地方における「曲り屋」などのごとく、人の住居する建物の一部であることもある。曲り屋は広く東北地方において見られるが、特に岩手県において多く見られるといわれる⁽⁴⁹⁾。

(イ) 馬を放し飼いにする土地は古くは牧(まき。馬城のこと)と呼ばれた。かかる意味における「牧」は武蔵国や相模国にとどまらず、信濃国や

甲斐国にも多数存在したとされている。このうちの信濃国の「牧」には大和朝廷の管理下にあるものとして16箇所⁽⁵⁰⁾の牧があったとされ、このことに関して前掲の風致維持向上計画書は次のように述べている。「筑摩郡内には、馬を飼育するための牧場である牧として、埴原牧と大野牧の官牧が置かれた。埴原牧は中山地区にあったとされ、信濃16牧を統括する牧監庁も設置され、長野県史跡に指定されている」と⁽⁵⁰⁾。

- (2) (ア) かかる馬の飼育生産は、既述したように、わが国においては5世紀ごろに渡来人によって推進されたといわれている。それは、この頃には東国にも多数の渡来人が居住し、この渡来人の先進技術による指導のもとに治水や馬の飼育が行われたことによるものとされている⁽⁵¹⁾。そして、このような渡来人の中には中国大陆からの渡来人も多く含まれており、相模国に移住した漢氏（はたし）は中国からの渡来人であってタバコや落花生の栽培技術を教授したといわれている。漢氏の居住地の現在の地名は神奈川県秦野市である。

群馬県（上野国）も良馬の産地として知られ、多数の馬の生産地であったところから、明治維新に際しての廃藩置県にあたり「群馬県」という県名が付けられたのではないと言われることがある。しかし、正確にはそうではなく、群馬という地名は上野国の古代豪族の一員であった「車氏」（くるまし）に由来する地名であり、「群馬」はかつては「くるま」と読まれたと言われている⁽⁵²⁾。車氏の中で著名な武将は車持君（くるま・もちのきみ）であったとされるが、車氏は江戸時代においても存在したとされている。

(イ) わが国において馬肉を食べる食文化は、長野県や山梨県や神奈川県にも見られるが（熊本県にも見られる）、同じように馬の産地である東北地方の各県では、馬肉を食べる風習はあまりないと言われる。これは長野県（熊本県についても同様）などにおいては馬を牧で放牧して生産するのに対して、岩手県などの東北地方では冬期の季節などには曲り屋などの家の中で家族のようにして飼育することに関連があるという。

神奈川県においても馬肉を食べる食文化が見られるが、これはかつて武蔵国や相模国には各地に軍団（たとえば、相模国では相原軍団など）が結成され、これに関連して多数の軍用馬が牧において放牧・飼育されたことによるものと考えられている。このほかにも、江戸時代から明治時代になった以降において、関東一円で蚕が飼育され、これによって生産された「まゆ」から紡がれた絹糸やこれによる絹織物を、馬車で八王子から横浜に移送する途中で体力を消耗した馬が食用にされたという風習も影響していると指摘されている⁽⁵³⁾。

6 養蚕業と農業との関連性

- (1) (ア) わが国の古代の人々は、生業として農業・漁業や畜産業を営んだほかに、養蚕業をも営んでいたと考えられている。これは、絹糸や絹織物（絹布ともいう）が租税の一種である「調」として納入しうるとともに、貨幣としての機能をも有していたことによるものである⁽⁵⁴⁾。このような絹糸や絹布の生産の前提になる「養蚕」という作業は、蟻の一種である「カイコ蟻」の幼虫の「蚕」（かいこ。「飼いこ」のこと。「こ」とは小さな生物の意味）を飼育し「繭」（まゆとは、一般的に、幼虫が自分を保護するために作った保護膜で包まれている物のこと）を生産する作業のことである。

このためには、そもそもカイコ蛾の卵（らん）を入手することが必要である。カイコ蛾は蛾の一種であって中国大陆に自生していたとされているが、今から数千年前（5000年前ともいう）に中国でカイコ蛾の飼育・改良が行われ、改良されたカイコ蛾の卵がヨーロッパを初め世界各地に伝播したとされている。わが国にも自生の蛾は何種類も存在するが⁽⁵⁵⁾、カイコ蛾はわが国には自生していなかったとされ、カイコ蛾は一般的には中国原産と言われている。

- (イ) 改良されたカイコ蛾の卵がいつごろわが国に伝播したかは正確には不明であるが、一説によれば、西暦668年に高句麗（こうくり。コクリョとも読む）が唐と新羅の連合軍に滅ぼされ、高句麗王であった若光王（じ

やっこうおお)がその一族を伴ってわが国に渡来し、武蔵国高麗郷(こまごう)に居住するに至った際に伝来したのではないかといわれている。そして、このような渡来人によって養蚕技術が高麗郷の人々に伝授され、それが信濃国をも含む関東一円に広まったとされるのである⁽⁵⁶⁾。このほかに、中国から朝鮮半島に伝播した養蚕技術が、畿内地方や大和朝廷にも伝わった可能性が無くはないともされている⁽⁵⁷⁾。

(ウ) きぬ(絹)という言葉は蚕のまゆ(繭)から造った絹糸を意味することもあれば、絹糸で織った絹織物(絹布)を意味することもあれば、その両方を意味することもある。古代の中央アジアにおける東西の交易通路がシルク・ロード(silk road)と呼ばれる場合の「シルク」とは言うまでもなく広義における絹を意味する言葉であるが、この表現は「シルク」という言葉を使用はしているが、絹のみにとどまらず人や物や文化などの総合的な伝播経路を意味したものでもある。これに対して、わが国における八王子から横浜への「絹の道」は広義における「絹」(絹糸および絹織物)の輸送街道を意味したに止まるものであり、人や文化の移動や伝播の経路は意味していない。

絹糸(けんし)にせよ絹布(けんぷ)にせよ、「きぬ」を生産するためには、何よりも「蚕」を飼育することが必要である。そのためには「かいこ蛾」の卵を入手しそれを飼育して「さなぎ」(蛹)にしなければならず、かかる発育過程の蛹が一般的には「蚕」と呼ばれる。これは、かいこ蛾の発育経過の過程にあるものであるから、そのまま時間が経過すれば成虫である蛾になってしまう。これでは絹糸を生産し入手することができないから、この発育段階にある蚕が保護膜を作り「繭」になった段階において繭から絹糸を取り出すことになる。

この繭から絹糸を取り出す方法は、かつては養蚕農家(多くは田畑を耕作するとともに養蚕をもする兼業農家)において女性の手作業で行われていたが、今日においては機械化されていることが多い。いずれの方法による作業であっても、基本的には煮沸(しゃぶつ)した繭から細い糸をたぐ

り、複数本を束ねて1本の糸にするという工程をたどる。このような工程は「糸紡み」（いとつぐみ）と表現され或いは「製糸」と表現される。そして、かかる工程を経て生産された絹糸によって絹布（絹織物）が製造されることになり、この工程は織布（しょくふ）と呼ばれる。

（エ） 蚕を飼育し多くの繭を収穫するためには、カイコ蛾の卵から多数の蚕を生産することが必要になる。そのために多くの農家は養蚕用の小屋を母屋に隣接した別棟として建築し、その床上や壁面を利用して多数の蚕籠（かいこかご）を並べて養蚕したと言われ、あるいは、母屋の天井裏を利用して養蚕したと言われている。いずれの場合においても、わが国における養蚕業は農業における労働力と密接な関連性を有するものであったのである。

しかも、養蚕には蚕の飼料として桑の葉が不可欠であるところから、養蚕農家は畑地の一部を桑畑とし或いは他の土地を桑畑に造成し多数の桑の木を栽培した。桑の木はカイコ蛾と相違してわが国に自生していたが、蚕は成長するために多量の桑の葉を食料とするところから様々な方法によって多数の桑の木を栽培したのである。ところが、わが国においては製品である絹糸や絹布が国内外ともに昭和50年代後半から売れなくなり、養蚕業は衰退しかつての蚕小屋は廃屋になり桑畑は果樹畑に変わりあるいは荒地になってしまったのである。

このようにして、現在のわが国は絹織物などの天然繊維に関しては世界的販売力を失ってしまっている。だが、かつての伝統的な天然繊維についての基礎知識と基礎技術は平成の現代においても存続している。そして、かかる基礎知識と基礎技術を利用して、合成繊維について世界的販売力を有する繊維を開発した中小企業が石川県の七尾市にある。それは従業員数がわずか47人の天池（あまいけ）合織株式会社という中小企業であり、極細（ごくぼそ）の緯糸（よこいと）と縦糸（たていと。経糸とも表記する）とを使用して「天女の羽衣」という名称の合成繊維を開発し生産している⁽⁵⁸⁾。

(オ) 昭和50年代の後半に至るまでは、長野県においても多くの農家が稲作を行うとともに兼業として養蚕業を行っていた。これは水田の耕作面積が十分でなく、農業（水稲耕作）だけでは生業としては不十分であったからである⁽⁵⁹⁾。たとえば、松本市について言えば、松本市入山辺三反田周辺の農家であり、長野盆地の南部について言えば、「田毎の月」で知られる姨捨山周辺の農家などである。信濃国では古代においては多くの牧で牛馬の生産がなされたが、明治時代以降において農家が兼業として畜産業を行うことは少なくなったと考えられる。このことは林業についても同様であるといってもよい。

これに対して、東北地方の福島県相馬郡飯舘村（いいだてむら）では事情がかなり相違し⁽⁶⁰⁾、生業としての水稲耕作だけでは十分でなく、「飯舘村史」によれば明治5年には戸数37軒で176匹の馬が飼育されており、この馬の飼育の伝統が平成の現代の牛の飼育にもつながったとされている⁽⁶¹⁾。飯舘村ではこのほかに林業（炭の生産）も行われていたとされる。そして、これについては「農業生産力の低さを畜産と林業で補う……構図」を看て取ることができると指摘されている。ところが、平成23年3月11日に東日本大震災が発生し、飯舘村におけるこれらの生業は一瞬にして不可能になってしまったのである⁽⁶²⁾。

注

- (1) 正丁（しょうてい。せいていとも読む）の年齢は時代とともに変遷しているが、基本的には21歳以上60歳以下の健康な男子とされていた。松村明・大辞林〈第3版〉1381頁。

正丁は兵役のほかに、税として「調」（諸国の物産に関するもの）をも負担したが、調の納入にあたっては、納入義務者である農民等が自己の負担において物産を奈良や京都の中央官庁に運搬したとされている。これに対して、田地に課せられる租税である「租」は諸国の地方官庁に納入され、地方官庁の財源にされたという。全国歴史教育研究協議会・日本史用語集27頁参照。

- (2) 神野志隆光・万葉集鑑賞事典250頁以下参照。

神野志（こうのし）教授の解説によれば、「からころむ」は「韓衣」（からころも）

の東国訛りであって異国風の衣の意味もあり、「おも」（母）も東国関係の歌に多いとされる。

信濃国の防人は、碓氷峠を越えて武蔵国に至り、古代東海道と山陽道を利用して北九州にまで移動したと考えられる。なお、朝鮮語でオモニとは母親のことである。

- (3) 相原氏（粟飯原氏とも藍原氏とも表記した）は平安時代を経て鎌倉・室町時代にも存在した豪族であって、武蔵七党の筆頭である横山氏の一族であったと言われる。多摩らいふ倶楽部「多摩ら・び」2011年10月号10頁参照。

武蔵七党としては、横山氏のほかに、猪俣・村山・私市（きさい）・丹・西・児玉の各氏が存在した。このうちの村山氏は武蔵村山市周辺を本拠地とし、児玉氏は埼玉県本庄市周辺を本拠地としたと想像されている。

- (4) 今日における「相原町（あいはらまち）」は東京都に帰属するが、相原の土地（座間郷）が二分されたことにより、相模国（境川の南側。現在の神奈川県）に所属する地域にも「相原」という地名が残っている。たとえば、神奈川県相原市相原1丁目など（1丁目から6丁目までである）である。この二分された座間郷（ざまごう）のうちの武蔵国に所属する部分である相原郷（あいはらごう）は元禄3年に上相原・中相原・下相原に分割されたのち、明治8年に相原村になったと言われる。町田市コンベンション協会・町田観光ガイドブック106頁。

- (5) 多摩らいふ倶楽部・前掲書10頁の地図を参照。

長野県諏訪にある諏訪神社（上社と下社とからなる。上社の本宮は諏訪市にあり、下社は諏訪郡下諏訪町にある）の祭神は、狩猟や農耕の神であるとともに軍事の神でもある。

長野地方裁判所の本庁は長野市に所在するが、支部には上田・佐久・松本・諏訪・飯田・伊那の6支部がある。このうちの佐久支部は少年事件を取り扱わず、少年事件は上田支部で取り扱うものとされている。6支部のうちでは松本支部の規模が1番大きい上田支部も規模の大きい支部である。

- (6) 「古代東海道」は2本あったといわれる。本来は常陸国から武蔵国・相模国を通り奈良の都へと続く幹線道路であったが、武蔵国の多摩丘陵南部に所在する野津田（のづた。現在の町田市の北東部）付近において2本に分れたといわれている。この野津田付近は現在では公園（野津田公園。これに隣接して都立野津田高校がある）になっているが、かつては軍事拠点だったと想像されている。

1本は野津田付近から鶴見川に沿って南下し横浜に至る商業ルート（店尾駅家ルート。まぢやのうまやルート）であり、他の1本は野津田付近から箱根を抜けて畿内に至る道（夷参駅ルート。いさまのうまやルート）であり、軍事ルートであったと想像されている。町田市観光コンベンション協会・前掲書130頁以下参照。

- (7) 葉師池は「福王寺池」とも呼ばれ、付近の水田の灌漑用水を供給するために造営された池であるといわれている。しかし、季節により水量にさしたる変化がなく、また水の枯れることもないところから、本来は多摩川水系の自然湧水を利用したものと考えられている。町田市観光コンベンション協会・前掲書67頁。

- (8) 善福寺池と同様に多摩川水系の伏流水による湧水池（第2次湧水池。第1次湧水池

は村山貯水池など)と考えられる池に井頭公園内にある「井の頭池」がある。この池はかつては水が渾々と湧き、水量が豊富で水の透き通るきれいな池であって、タナゴやウグイやクチボソなどの各種の在来種の小魚が泳いでいたと言われているが、昭和30年代の後半から水が汚濁してしまったとされる。朝日新聞平成24年3月17日〈朝刊〉29面参照。

この井の頭池を水源とする上水がいわゆる神田上水すなわち神田川であり、その水系は広く神田川水系と呼ばれている。そして、善福寺池から流出する善福寺川は杉並区内で神田川に合流しており、この川も神田川水系に属するものと分類されている。

なお、東京都青梅市から東南に約3キロメートルほど隔った所に東京都羽村市がある。この羽村市(はむらし)は多摩川に面した都市であり、江戸時代(1653年といわれる)に玉川兄弟(玉川庄右衛門・清右衛門兄弟)によってこの川の水を利用した上水の工事が起工され翌年に完成したとされる。この上水が太宰治で知られる「玉川上水」である。

- (9) 朝日新聞平成24年2月16日〈朝刊〉31面参照。しかし、「落合川は40ヵ所ある排水口のうち3ヵ所で、黒目川は93ヵ所のうち15ヵ所で、それぞれ生活雑排水の流出を確認したという」と。この「南沢湧水群」の付近は、多摩川の伏流水の第2次湧水地であると考えられている。

これに対して、本郷の東大構内にある「三四郎の池」などは第3次湧水池(地)であると考えられている。また、朝日新聞平成24年3月28日〈朝刊〉28面によれば、東急目蒲線大岡山駅付近に「清水窪」(しみずくぼ)という地名の低地があり、ここでも「清水窪弁財天」の神社境内で自然湧水池が見られる。この池も第3次湧水池と考えられる。

- (10) たとえば、承知川や鰻沢川や鮎沢川などである。
(11) 諏訪湖も琵琶湖も、ともに日本列島の内陸の中央部に位置する大湖であり、しかも、ともに断層の一部の凹地に存在する断層湖でもあるという共通点に注目すると、諏訪湖の形成にとって最も大きな影響を与えたものは四方から流入する河川の流水ではなく、地中から湧出する地下水であったのではないか、という見方も成り立ちうる。
(12) 「湖池沼」は通常は「湖沼」と表現されるものであり、湖沼学という場合には「湖」と「沼」だけを意味するものではなく、いうまでもなく「池」についての学問でもある。

わが国においては湖池(こち)という表現はあまり用いられないが、湖池とは湖と池とを意味する正式の漢字である。服部宇之吉＝小柳司気太・改訂増補詳解漢和辞典1071頁。これに対して、池沼という表現は湖沼とともによく用いられる。

- (13) 朝日新聞平成24年8月25日〈朝刊〉38面。
(14) これらの記述については、いずれも基本的にフリー百科事典ウィキペディア(Wikipedia)によっている。
(15) 女鳥羽川の記述についても、同じくウィキペディアによっている。
(16) 女鳥羽川の鯉の放流されている地点から、上流に向って数分歩くと橋があり、その右側のたもとに、「まるも」(丸茂)という名前の喫茶店(コーヒー・ショップ)があ

る。この店は約50年前の昭和30年代の初めにはすでに営業していた由緒あるコーヒー店であり、信州大学の文理学部の学生もよく利用した老舗である。

- (17) 梓川も奈良井川も女鳥羽川も、ともに国土交通大臣の指定にかかる1級河川である。
- (18) 奈良時代以降においても、「恩田」という言葉は一般的に陽当たりの良くない田地を意味したようである。そして、「隠田」（おんだ）とは租の課税を免れるための「かくしだ」を意味したとされる。また、「免田」（めんだ）とは自然災害などにより稲の収穫が著しく悪かった場合に、租税の一種である「租」の全部または一部が特別に免除された田地（損田とは自然災害などにより収穫の減少した田地）のことといわれている。

なお、奈良町は奈良川の流水を利用して水田耕作が可能であったが、水利が良くなく水稻の栽培が困難な地帯では、非食用植物の「麻」の栽培が行われ、これが奈良町の所在する川崎市麻生区（あせおく）の「麻生」の語原になったとされている。

- (19) 引田一族は奈良時代以前においてすでにこの他に住み着いていたと言われていて、現在でも川崎市麻生区奈良町や町田市の恩田川添いには引田姓の人がわずかながら居住している。そして、鈴木三重吉の「古事記物語」198頁には、「雄略天皇」についての以下のような記述がある。この雄略天皇は皇太子時代には「大泊瀬幼武」（おおはつせわかだけ）といい、5世紀末頃に在位したとされている。

「天皇はあるとき、大和の美和川（みわがわ）のほとりへお出ましになりました。そうすると、1人の娘が、その川で着物を洗っておりました。それはほんとうに美しい、かわいらしい娘でした。天皇は、『そちはだれの子か』とおたずねになりました。『私は引田部（ひけたべ）の赤猪子（あかいのこ）と申します者でございます』と娘はお答え申しました。天皇は、『それでは、いづれわしのお宮へ召し使ってやるから待ていよ』とおっしゃって、そのままお通りすぎになりました」と。

- (20) 口分田は、良男や良女などの良民に付与されたのみならず、家人（けにん）や私奴婢（しぬひ）などの多くの賤民にも付与された田地であり、班田収受法を全国的に実施するためには水田が不足していた。そこで、このことを認識した大和朝廷は、この制度を陸田にも拡大しようとし、また、各地の有力者に水田の開墾を奨励したと言われている。網野善彦・石井進＝米・百姓・天皇78頁以下。

このような事情は信濃国においても同様であり、松本市歴史的風致維持向上計画書〈平成23年6月15日更新〉13頁は以下のように記述している。「律令制の下で、農地を広げるための開墾が奨励された市内では奈良井川より西側の地域で、特に盛な開発が行われ、大規模な集落が形成された。このような奈良・平安時代に開発された大規模な集落の例として……南栗遺跡……下神遺跡……三間沢川左岸遺跡などがあげられる」と。松本市を流れる奈良井川の川名も、川崎市を流れる奈良川に類似して、奈良の都に因んだ川名であると想像される。

- (21) 引田氏の「引」という文字には、「引っぱる」という意味のほかに「広げる」という意味もある。たとえば「引而伸之」（引きて之を伸す。伸すとは長くする程の意味）という場合の「引」という文字である。

また、「弘」という文字にも広げるという意味がある。たとえば、弘文堂書店とい

う場合の弘文（学問を広めるという意味）という文字であり、吉川弘文館という場合の「弘文」である。

- (22) 坂上康俊・律令国家の転換と「日本」276頁以下。

- (23) 坂上・前掲書276頁。

- (24) 柿は古代からわが国の各地で自生していたといわれている。また、柿はその果実を食用にするために古代から栽培もされていたといわれている。そして、「カーキ色」とは柿色のことであり、英語では khaki colour と表現される。これは、日本産の柿の果実の種がヨーロッパに伝播し、果実が熟して黄赤色になった皮の色が khaki colour と表現されたものとされる。また、カーキ色は黄赤色であるところから yellowish red ととも表現される。これに対して、カーキとはサンスクリット語の「土ぼこり」を意味する khaki に由来する言葉であるとする見方もある。松村明・大辞林〈第3版〉398頁参照。

- (25) 岩田一平・縄文人は飲んべえだった 111頁。ここでは、加藤臣一・日本の酒5000年が引用されている。

井戸尻遺跡は、長野県諏訪郡富士見町に所在し、JR 中央東線の信濃境駅の近くにある。信濃境駅の次の駅は小淵沢駅であるが、信濃境駅の周辺には民家はほとんど見当たらない。

なお、木の実などから酒を醸造する場合には人の口で嚙んで醸造する方法があるが、本文にいう「土器にヤマブドウを仕込んで果実酒をつくっていた」という表現は、土器に山ブドウ液を入れ空気中のバクテリアの作用で発酵させていたという意味のようである。

- (26) 朝日新聞平成24年8月31日〈朝刊〉29面。これらの地域は養蚕業の発達した地域とほとんど一致するものである。

- (27) 町田市観光コンベンション協会・前掲書117頁。

- (28) 「鎌倉街道上ノ道」は、軍事上の重要拠点である野津田の南方約3キロメートルの地点で「町田ルート」と「成瀬ルート」とに分岐する。

このうちの成瀬ルートは、「成瀬城の東側を通り、鶴見川に添って南下した」と推定されているが、成瀬城がどこに所在したかは今日では必ずしも明らかではなくなっている。町田市観光コンベンション協会・前掲書130頁参照。

- (29) 鎌倉時代の元徳年間（1329年から1330年までの期間）において、相模国のほぼ中央部に位置する渋谷荘（しぶやのしょう）の領主として渋谷一族がいた。渋谷一族は鎌倉幕府の草創期（元徳年間は終末期）にあつて、その軍功により荘園の名前を一族の名字にすることが許されたといわれている。笈雅博・蒙古襲来と徳政令24頁。

この渋谷一族の中でも特に著名な武将は渋谷重国と渋谷定信であつた。この定信は重国の孫にあたるが、祖父の重国は「置文」（おきぶみ）を書き残しており、この文書は鎌倉時代についての最も貴重な資料とされている。笈・前掲書25頁。なお、相模国高座郡渋谷荘の「渋谷」という地名は、現代においても小田急江ノ島線の「高座渋谷」という駅名としてその名残をとどめている。

- (30) 若狭 徹「考古学から見た韓流ブーム」書齋の窓2012年3月号57頁。

この論文の54頁以下によれば、この頃（5世紀ごろ）に、「伽耶から輸入された鉄インゴットを製品に加工する遺構……の検出が激増する」とされている。

また、「畜力による動力革命をもたらした馬の生産も、この頃渡来人によって推進された」されている。

- (31) 朝日新聞平成24年4月27日〈朝刊〉37面参照。山梨県の女夫石遺跡は山梨県韭崎市に所在し、JR中央東線の韭崎駅と新府（しんぷ）駅とのほぼ中間地点に位置している。

山ブドウの種の付着した縄文土器が発見された長野県の井戸尻遺跡と、ツルマメの種の圧痕のついた縄文土器が発見された山梨県の女夫石遺跡とはともに八ヶ岳の南麓にあり、直線距離では約20キロメートル離れているにすぎない。

- (32) 縄文人も、麻などの植物の繊維から手織りで布（麻生。あさふ）を作る技術をもっていたといわれている。これに対して、機械織りの技術は弥生時代以降に中国大陸・朝鮮半島からわが国に伝播したものとされている。なお、中国原産の芭蕉の木からも布（芭蕉布。ばしょうふ）が作られるという。
- (33) 原田信男・日本人はなにを食べてきたか 40頁では以下のように記述されている。「近年、考古学でもこれを裏付けるような遺物が発見されている。すでに縄文前期や中期の遺跡から、ヒョウタン・エゴマ・シソ・マメ類・ゴボウ・ソバなどの果皮や種子や花粉が検出されている」と。また、同書41頁では「さらに縄文後期や晩期の遺跡からは、北海道や東北でもソバやアワ・キビなどの花粉や種子が出土している」と述べられている。

しかし、これは、ソバなどの種子が縄文時代に中国（現在の中国ではソバはミエンすなわち麺と呼ばれる）や朝鮮（現代の韓国ではソバはソバ或いはメミルと呼ばれる）から伝来したとする見解であって、それが今日におけるような料理の仕方をも伴って伝来したことを意味するものではない。今日のわが国におけるソバは「そば切り」或いは「切りそば」と呼ばれ、このような「そば」は江戸時代以降に一般化したとされている。

- (34) 山岡内燃機製作所は後に社名を「ヤンマーディーゼル株式会社」と変更し今日に至っている会社であるが、「山岡内燃機」という社名であった時期における有名な労働事件として山岡内燃機事件があり、この事件は平成の現代においてもスタンダードな労働法のテキストに引用されている。たとえば、菅野和夫・労働法〈第9版〉685頁および687頁などである。
- (35) 生業とは、別言すれば、人々が家庭生活のために必要な物資や貨幣などを取得するために行う労務の提供のことである。生業はドイツ語ではErwerbstätigkeitといわれる。Erwerbとは本来的には「獲得すること」という意味の言葉であり、Tätigkeitとは仕事や活動のことである。

したがって、ドイツ語のErwerbstätigkeitとは金銭を獲得するための仕事ほどの意味である。このことに関連して、「稼ぐ」と「払う」ということの意義についてどちらを先行させるかは、各人の人生感によって相違するといわれている。

わが国において国会議員の政治活動が「生業」（なりわい）といえるか否かについて

ては意見が分かれる。生業を「人が家庭生活を営むための基礎になる各種の仕事」と理解すれば、代議士などの政治活動も生業であることになる。しかし、二代目・三代目の者が国会議員になるとしても、それは有権者の選挙の結果であり世襲によるものではないから、かかる場合における国会議員の政治活動は「生業」ではあるが「家業」とはいえないことになる。

- (36) 農業や漁業や畜産業などの「なりわい」を営む基礎になる財物としては、田畑などの土地や漁業権などの権利や放牧のための牧場などが必要であり、これらは総称して「なりわいの基」と呼ばれることがある。
- (37) 今日のわが国において鍋物（ドジョウ鍋や柳川鍋など）として食されるドジョウは体長が10センチメートルから15センチメートル位のものであるが、ドジョウと呼ばれるものには各種のものが、「台湾ドジョウ」と呼ばれる体長60センチメートルに及ぶものもある。これは台湾産であり「雷魚」とも呼ばれる。

これに対して、わが国に自生するドジョウには「ホトケドジョウ」と呼ばれるものもあり、これは体長が5センチメートル位の小型のものである。本州や四国の河川や水田に分布する絶滅危惧種のドジョウであり、東京都町田市を東西に流れる鶴見川の水源地域にも生息している。鶴見川源流ネットワーク「市民が憩える川の自然」季刊まちびと平成24年春号20頁参照。

- (38) 鯉は、英語では carp であり、ドイツ語では Karpfen（カルプフェン。ドイツゴイともいう）であり、フランス語では carpe である。

世界の各地で自生する野生のコイが「ノゴイ」と呼ばれるのと同様に、各地で自生する野生のヤギ（たとえば、尖閣列島で自生するヤギ）は「ノヤギ」と呼ばれる。

- (39) ドジョウや鯉と同様に淡水魚であるが、河川の清流区域でのみ生息する魚に「イワナ」がいる。これは骨が硬く燻製に適しているために、古く縄文時代から保存食として食されてきたものであり、松本地方における縄文遺跡からも出土している。松本市立考古博物館・考古館新聞平成21年10月15日2面参照。

イワナ（岩魚）はサケ科の淡水魚で、サケが産卵のため河川を遡上した後には内陸に陸封されたものといわれている。イワナは一般的に河川の清流区域に生息するが、河川の清流区域のうちより上流域に生息する場合には「ヤマナ」と呼ばれることもある。「ナ」とは魚を表わす文字として使用され、鯨は古代にはイサナと呼ばれたという。なお、縄文時代の保存食としては魚のほかには山菜や木の実などもあったという。

- (40) イルカはわが国では高知県太地町の沿岸地域で生息しているが、韓国では朝鮮半島南方の済州島の近海で生息しているといわれる。
- (41) 群馬県高崎市では「積石塚群」が発見されており、「積石塚そのものが朝鮮半島北部に遺源をもつ墳墓であり、渡来集団の存在は疑えないところである」と指摘されている。若狭 徹「考古学からみた古代の馬生産」書斎の窓平成24年5月号61頁参照。

なお、網野・石井＝前掲書37頁参照。ここで、網野教授は「たとえ東国・東北に水田の遺跡が一部出てきても、それを直ちに弥生文化といい切ってしまうてよいかどうか問題です」と発言している。

- (42) 鮭という漢字は和製漢字ではなく中国漢字である。しかし、「鮭」という漢字はサ

ケを意味する漢字ではなくフグ（河豚）を意味する漢字である。したがって、「鮭肝」といえば「フグの肝」のことになり、「王充論衡」中には「鮭肝死人 鮭の肝，人を死なす」という表現がある。服部＝小柳・前掲書1997頁参照。

「鮭の肝」すなわち「フグの肝」とは多くはフグの肝臓や卵巣のことであり、毒（テトロドトキシン）をもつことがあるので、これらは食品衛生法や都道府県の「ふぐ取扱規制条例」によって客に提供することが禁止されている。ところが、ミシュランガイドで「二つ星」の店とされた東京銀座の有名フグ料理店が「肝ぼんず」を提供し、食品衛生法違反および東京都条例違反で書類送検されたのである。朝日新聞平成24年4月6日〈朝刊〉39面参照。

- (43) 松本市考古博物館・前掲考古館新聞2面参照。
- (44) 現在は海洋に面していない内陸地域において、イルカやクジラの化石の発見されることが時としてある。たとえば、平成24年3月に関東地方の栃木県で大型のクジラの化石の発見されたのがその一例である。これは約1000万年（約1000年ではない）前にはこの地帯が海洋であったことによるものと説明されている。
- (45) 醬油漬けアワビなどは、富士川街道によることなく富士川河川それ自体を利用して甲斐国に移送されることもあったと考えられている。この場合の荷物の積降地点は富士川の鰍沢（かじかざわ）の地点であったといわれている。
- (46) 太平洋からの「塩ノ道」のほかに、日本海からの「塩ノ道」もあったという。それは、日本海で製造された食塩を松本盆地にまで移送するためのルートであり、越後国（新潟県）の糸魚川から姫川沿いに南下し、大町を経由して松本盆地（これも塩尻まで）に食塩を移送する街道であったという。
- (47) 塩尻とか井戸尻とか池尻という場合の「尻」という文字は、いずれも最終地点を意味する文字である。
- (48) 若狭 徹「考古学から見た韓流ブーム」書斎の窓平成24年2月号8頁以下参照。
- (49) 東北地方には曲り屋のほかに「中門造り」と呼ばれる建物がある。これも建物の一部に馬を飼育するための場所がある建物であり、曲り屋と同様の機能を有するものである。
- (50) 前掲・松本市歴史風致維持向上計画書16頁参照。
- (51) 若狭・前掲論文58頁以下。前掲・注(30)参照。
- (52) 今尾恵介・地名の謎219頁以下参照。
- (53) 関東一円で生産された絹や絹織物を八王子を経由して横浜に輸送した街道は「絹の道（シルク・ロードともいわれる）」と呼ばれ、この街道沿いにかつては多数の宿場町と馬肉料理の店舗があったとされており、平成の現在でも東京都町田市には「柿島（かきじま）」という名前の馬肉料理店が営業し繁盛している。
- (54) 網野・石井＝前掲書37頁以下参照。
- (55) わが国における「蝶」の種類には黒アゲハやオオムラサキなど各種のものがおり、このうちのオオムラサキは長野県に隣接する山梨県の北杜市長坂町（ながさかちょう）に自生し「国蝶」に指定されている。

これに対して、同じく蝶の一種としてモンシロチョウがいる。これは小形で色が白

く楚々としているところから日本原産のチョウと誤解されるが、比較的最近（第2次大戦後とも言われる）に見られるようになった外来種である。

- (56) 養蚕技術は高句麗からの渡来人によってわが国に伝播し関東一円に広まったと考えられているが、このことと同様のことが「茶」についても指摘されており、若光王が高麗郷に居住するに至った際に茶の種子も伝来しそれが狭山茶の起源になったともいわれる。しかし、これに対しては、僧の栄済（えいさい。ようざいとも言う）が宗に渡り帰国した際に茶の種子が伝来しそれが狭山茶の起源になったという見方もあり、この方が正確なようである。
- (57) 中国においては、周（西周および東周。東周は紀元前249年ごろに滅亡）や漢（前漢および後漢。後漢は西暦220年に滅亡）の時代から、正月の最初の子（ね）の日に国王が自ら耕作をし、また、皇后が自ら養蚕をするという儀式があったとされている。神野志・前掲書246頁。

なお、「蚕」はわが国でも古来から貴重で目出たい虫とされており、関 晃・帰化人120頁以下によれば、古事記の仁徳天皇の段に以下のように記述されているという。

「〔仁徳天皇の皇后が〕ここに来られたのは奴理能美（ぬりのみ）の飼っている虫が、一度は匍（はう）虫となり、一度は殻（かい）となり、一度は飛ぶ鳥となり、三色に変わる珍しい虫なので〔あるからである〕」と。次田真幸・古事記（下）44頁以下をも参照。

- (58) 朝日新聞平成24年3月26日〈朝刊〉4面参照。なお、石川県は合成繊維の全国生産額の3割近くを占めているという。
- (59) 平成23年度のコメの生産量（収穫量のこと）が多い都道府県の上位10位は以下のとおりであるが、長野県は土地面積は広いがコメの作付面積は狭く、生産量（21万9400トン）は全国20位である。

1 位北海道・2 位新潟県・3 位秋田県・4 位茨城県・5 位山形県・6 位宮城県・7 位福島県・8 位栃木県・9 位千葉県・10 位岩手県。

- (60) 現在の飯館村は、昭和31年に旧大館村と旧飯曾村（いいそむら）とが合併して成立した村である。

- (61) 朝日新聞平成24年8月31日〈朝刊〉3面参照。

- (62) 飯館村に所属する長泥区（ながどろく）の区長である嶋原（しぎはら）良友氏は、かつての長泥地区について、「長泥辺りが本格的に開拓されたのは明治になってからではないか」と指摘した上で、今日の長泥区について以下のように説明している。

「コメは反当たり7俵。1俵60キロで7000円、補助入れて1万2000円だ。俺は稲わらを牛のえさにするから回転してるけれど、収入なんてほとんどゼロだからな。機械買ったらマイナスになるからな」。「コンバインに600万円、もみすり機と一緒に買って1000万円。トラクターもいる。農業収入から返すのは難しい」と。前掲・朝日新聞注(61)を参照。

Ⅲ 家事労働と家内労働との異同、および、各種の家事労働

1 二種類の家事労働の概念と、屋内労働としての家内労働の概念

- (1) (ア) 家事労働という概念は多義的であるが、一般的には、「日常的な家庭生活を営むために必要な各種の労務の提供」という意味に理解されている⁽¹⁾。たとえば、炊事や洗濯や掃除や育児などである。しかし、家事労働という概念には広狭二様の意味があり、狭義にはこのような意味の労務提供のうちの雑事的性質のものに限って「家事労働」と呼ぶことが多い。かかる用語法による場合には、「炊事・洗濯・掃除」などは言うまでもなく家事労働であるが、「育児」はその重要性のゆえに家事労働とは呼ばないことがある⁽²⁾。

(イ) これに対して、上述した「日常の家庭生活を営むための各種の労務の提供」という一般的な理解の仕方と相違して、より広義に家事労働を「家屋内において行われる各種の労務の提供」という意味に理解することもある。かかる広義の用語法によれば、中小企業について見られる家屋内労働（家内労働）も家事労働に含まれることになる。そして、かつては、この意味の家内労働（家屋内労働）を広義の家事労働の中に含めるのではなく、そもそも家事労働という概念と家内労働という概念とが混乱して使われることもあったと言われている⁽³⁾。

2 緒外国における家事労働の概念

- (1) (ア) 家事労働に対応する外国語として、イギリスにおいては housework という概念がある。これに関しては、少なくとも広狭二様の意味があり、housework とは狭義では「家事向きの仕事（裁縫・料理・洗濯・掃除）」のことと説明され、そして、このことに関連して、housewives とは「裁縫道具入れ」のことであり、「針・はさみ・縫糸・ボタン・小切れなどを入れる袋または小箱」と説明されている⁽⁴⁾。ここでは雑事的性質の労務提供が主として問題にされているといってよい。

これに対して、広義には housework は「掃除・洗濯・食事の仕度・育

児」などのことであると説明されている。掃除とは house cleaning のことであり、洗濯とは washing clothes のことであり、食事の仕度とは meal preparation のことである。そして、育児とは child care のことである⁽⁵⁾。しかも、さらに広義には、家屋内でする仕事（内職や家内工業など）である homework も含めて housework と呼ばれることがないわけではない⁽⁶⁾。この場合における house は dwelling と同義に使用されているものといつてよい。

(イ) 家事労働に対応するフランス語としては ménage という概念がある⁽⁷⁾。これに関しても少なくとも広狭二様の意味があり、ménage とは狭義には家庭生活を営むための雑事的性質の労務の提供である掃除や片付けを意味し、特に「掃除」を意味するものとされる⁽⁸⁾。これに対して、広義には ménage は家政一般を意味し、家政の切り盛りが上手であること即ち世帯持ちが良いことは conduire bien son ménage と表現されることがある⁽⁹⁾。

そして、ménage に類似の概念として、travail ménager（家事的労働 複数形は travaux ménagers）という概念もある⁽¹⁰⁾。この二文字からなる概念は当然に雑事的性質の労務提供である炊事・洗濯を含むものと考えられるが、この概念は ménage よりも広義の概念と考えられるので、この中には育児（soin du enfant soin とはイギリス語では care のこと）も含まれると思われる。さらに、travail ménager に類似する概念として travail domestique（複数形は travaux domestiques）というものもあるが、これは一般的には人間以外の動物に関して用いられるものであり、これには育児は含まれないことになる⁽¹¹⁾。

(ウ) ① 家事労働に対応するドイツ語としては、Hausarbeit という概念がある。これについても、同じヨーロッパ語であるイギリス語やフランス語と同様に少なくとも広狭二様の意味があり、Hausarbeit とは狭義では家庭生活を営むための雑事的性質の労務提供である料理や掃除などのことを意味するものとされている⁽¹²⁾。また、広義には同一家屋内において

行われる家屋内労働（家内労働）も含まれるものとされている⁽¹³⁾。

そして、Hausarbeit をこのような広義の家屋内における各種の労務提供の意味に理解する場合には、育児も Hausarbeit の中に含まれる余地があることになる。このことに関連して「家庭の主婦」は Hausfrau（家屋内における女性）と呼ばれ、また、「家庭の必需品」は Hausbedarf（家屋内における必要品）と呼ばれている。この主婦（Hausfrau）という表現には、わが国における主婦という表現ほどには社会的評価が低い者というニュアンスは込められていない⁽¹⁴⁾。むしろ、家政の切り盛りの上手な主婦は eine gute Hausfrau と呼ばれる⁽¹⁵⁾。

② ドイツにおいては、ナチス時代⁽¹⁶⁾の1943年10月22日に「自由時間令」(Freizeitverordnung) が制定され、女性被用者 (Arbeitnehmerin) が家事労働 (Hausarbeit) を行うために、1 か月ごとに労働日における労働の免除される家事労働日 (Hausarbeitstag) の制度が定められた⁽¹⁷⁾。ここにいう家事労働とは広義における家事労働を意味する概念であり、育児の含まれることは疑問の余地がないものであった。そうでないならば、このような労働日を法定することはほとんど意味がないことになってしまうからである。

ところで、ドイツにおいては、ほぼ同時期に、ライヒ労働裁判所が学説の影響をも受けて、信義則に基づく使用者の配慮義務 (Fürsorgepflicht) を根拠にして、労働者の使用者に対する年次休暇請求権 (Urlaubsanspruch) を肯定した⁽¹⁸⁾。そして、ライヒ労働裁判所の判例法理は第2次大戦の終了後に連邦労働裁判所にも受け継がれた⁽¹⁹⁾。したがって、1943年の「自由時間令」は実際的にはほとんど意味のないものであった。しかも、ドイツでは、1963年1月8日に連邦法である連邦年次休暇法 (Bundesurlaubsgesetz) も制定され数次の改正を経て今日に至っているのである⁽²⁰⁾。

- (2) (ア) わが国において家事労働という概念は単に「家事」と呼ばれることも多いが、「家事」という概念は民法中にも見られるものであり、民法761

条は以下のように規定している。「夫婦の一方が日常の家事に関して第三者と法律行為をしたときは、他の一方は、これによって生じた債務について、連帯してその責任を負う。ただし、第三者に対し責任を負わない旨を予告した場合は、この限りでない」と。

この規定は平成16年法律147号により改正されたものであり、改正前の761条はほとんど同文であるが以下のように規定していた。「夫婦の一方が日常の家事に関して第三者と法律行為をしたときは、他の一方は、これによって生じた債務について、連帯してその責に任ずる。但し、第三者に対し責に任じない旨を予告した場合は、この限りでない」と。

この条文は、明治31年法律9号として公布された民法（旧法）中の804条について、第2次大戦後に日本国憲法が24条2項において「家族に関する……事項に関しては、法律は、個人の尊厳と両性の本質的平等に立脚して、制定されなければならない」と規定したところから、民法も「法律」の1つであるから昭和22年法律222号として「個人の尊厳」と「両性の本質的平等」の趣旨に添って改正されたものである。そして、これと同時に、民法の基本原則を定める第1条と解釈の基準を定める第2条とが追加されたのである⁽²²⁾。

(イ) 昭和22年法律222号による旧法840条の改正は、日常の家事責任（家事債務）に関して、妻を夫の代理人と見做していたものを夫妻の連帯責任にすることに改正したものである。そして、1か条前の760条については、旧法798条が「結婚生活費」を夫一人の負担としていたものを夫婦の分担に改正したのであり、また、1か条後の762条1項では、旧法807条1項が「夫妻別産制」について妻にだけ特有財産を認めていたものを夫妻双方に認めたのである⁽²³⁾。

このうちの家事債務（日常家事債務）に関して、我妻教授等は以下のように解説している。「日常の家事に関するといいうるものの中には、例えば食料品その他日用品の購入、家賃、地代、電気代、燃料代などはもちろん含まれる。また、普段着の新調は含めてよいが、しかし外出着になると、

あまり身分不相応な高価な物を入れるべきではない……電話も、まだわが国の生活水準では、除外の部に属するであろう」と⁽²⁴⁾。この解説はわが国の経済が高度成長期に差ししかかった当時のものであり、平成時代の現在との比較において隔世の感があり、まことに感慨深いものがある。

- (3) (ア) ドイツ（西ドイツ）のBGB中にも、わが国の民法の旧804条に類似する規定があった。このBGBの規定も今日では改正されて存在しないが、旧BGB1357条1項本文は以下のように規定していた。「妻は家事（Hauswesen）上ノ範囲内ニ於テ夫ニ代リ其事務ヲ処理シ且夫ヲ代理スル権限ヲ有ス。妻カ其事務ノ範囲内ニ於テ為シタル法律行為ハ夫ノ名ニ於テ為シタルモノト看做ス」と。

(イ) そして、同条2項も以下のように規定していたのである。「夫ハ妻ノ権利ヲ制限又ハ除斥スルコトヲ得。妻ノ権利ノ制限又ハ除斥カ夫ノ権利ノ濫用ナルコト明ナルトキハ後見裁判所（Vormundschaftsgericht）ハ妻ノ申請ニ因リ之ヲ取消ス（anfechten）コトヲ得。制限又ハ除斥ハ第三者ニ対シテハ第千四百三十五条ノ規定ニ従ヒテノミ其効力ヲ有ス」と。もっとも、「夫カ妻ノ債務負担ニ同意」した場合には、1358条2項により妻も家事債務を負担するものとされていた⁽²⁵⁾。

- (4) (ア) わが国において「家事」という言葉は一般的に「家事労働」を省略した言葉として使用されることがあり、この場合には当然のことながら「家事」という言葉の内容として労務提供行為が包含されることになる。しかし、「家事」の労務提供行為性を特に強調する必要がある場合には「家事労働」という言葉が用いられることになる。このことはフランス語におけるménageという言葉に関しても類似する面があり、ménageはそれ自体で家事労働を意味する言葉であるが、その労務提供性を強調する必要がある場合にはtravail ménager（複数の場合にはtravaux ménagers）という表現が用いられる。

(イ) わが国の民法も「家事」という概念を使用している。すなわち、民法761条1項は、本文において「夫婦の一方が日常の家事に関して第三者

と法律行為をしたときは、他の一方は、これによって生じた債務について、連帯してその責任を負う」と規定した上で、その但書において「ただし、第三者に対し責任を負わない旨を予告した場合は、この限りでない」と規定しており、本文中において「家事」という表現を用いている。

この規定は平成16年法律147号により改正されたものであるが、改正前の法文も改正後の現行法文とほとんど全く同文であり、改正前には本文が「夫婦の一方が日常の家事に関して第三者と法律行為をしたときは、他の一方は、これによって生じた債務について、連帯してその責に任ずる」というものであり、但書が「但し、第三者に対し責に任じない旨を予告した場合は、この限りでない」というものであって、「但し」が「ただし」に、「責に任ずる」が「責任を負う」等に変更されたにすぎないものであったが、この規定中においても「家事」という表現が用いられていた。

(ウ) ここで問題にされている「日常の家事に関して」という概念における「家事」とは、「家事労働」という文言が消略された家事ではなく、「家庭内における各種の事柄ないし事情」というほどの意味であると理解することができる⁽²⁶⁾。これは「家事の都合により会議を欠席する」という場合の「家事」と同様の意味であり、この中には労務の提供という意味は含まれていない。そして、外見上は1個の単数の名詞であるが内容的には複数の事柄を意味している名詞を集合名詞（総合名詞ともいう）と呼ぶとすれば（イギリス語における family や、フランス語における on や、ドイツ語における man など⁽²⁷⁾）、民法761条に言う「家事」は集合名詞に類似したものと理解することができることになる。

そして、このことは、ドイツ（西ドイツ）における1957年の同権法（男女同権法 Gleichberechtigungsgesetz）により改正される以前のBGB1357条1項についても同様であり⁽²⁸⁾、この規定もわが国の民法（旧法）804条に類似して「妻カ家事（Hauswesen）上ノ……事務ノ範囲内ニ於テ為シタル法律行為（Rechtsgeschäfte）ハ夫ノ名ニ於テ為シタルモノト看做ス」と規定して、広く家事（Hauswesen）とこれに関連する各種

の法律行為 (Rechtsgeschäfte) とを問題にしている⁽²⁹⁾。

3 わが国における各種の家事労働

- (1) (ア) 家事労働 (労働という2文字を消略した「家事」という言葉についても同様) を「日常の家庭生活を営むために必要な労務の提供」という意味に把握する場合に、先史時代から古代を経て現代に至るまでに、わが国においては実に多種多様な家事労働が実施されてきたといえることができる。そして、家庭生活に必要な家事労働を実施する主体は、家族の一員である自然人のこともあれば、家族の手足として労務を提供する家族でない自然人のこともあったが、いずれの場合においても自然人であるから、出生した後に成長し老化して行く存在であったといえることができる。

そして、家族の一員としての家事労働者が子の父や母である場合には、このような自然人は当然に子の「育児」という家事労働を分担したと考えられる。たとえば、奈良時代の歌人である山上憶良は「憶良らは、今は罷らん、子泣くらん、それ、その母も吾を待つらんぞ」という和歌を作製し、これは万葉集巻3に集録されている。この和歌は憶良とその妻が家事労働として子の育児を共同して行っていたという家庭生活の実態を前提にして作製されたものと理解することができる⁽³⁰⁾。このほかに、「瓜はめば、子ども思ほゆ、栗はめば まして偲ばゆ。いづくより来たりしものぞまなかひに、もとなかかりて安眠 (やすい) しなさぬ」という憶良の一首も万葉集に集録されている⁽³¹⁾。

万葉集は770年頃に成立したとされる和歌集であり、1巻から20巻までの全20巻から成っている。ここに集録されている和歌は約4500首に上り、全体が「雑歌」(ぞうか)と「相聞歌」(そうもんか)と「挽歌」(ばんか)との3編に分れている⁽³²⁾。編者が誰であるかは正確には不明とされるが、大伴家持が編者の1人(中心的な1人)であったことには異論がない⁽³³⁾。そして、家持は憶良の歌風に深く共感しており、憶良の和歌を積極的に万葉集に収録したと想像されている。

- (イ) 家庭生活を営む主体が子と父母やその他の成人・老人である場合に

は、家事労働としての育児のほかに「炊事」も必要不可欠である。炊事という言葉は一般的には「食材を切揃え、必要に応じて煮炊きすること」と理解することができる⁽³⁴⁾。わが国では縄文時代や弥生時代の先史時代から現代に至るまで、豊富で新鮮な魚介類を容易に入手することが出来たところから、炊事という家事労働に関しては食材を切揃えることでこと足りることも多かったが、ヨーロッパ諸国でいう cooking や cuisine や Küherei はいずれも煮炊きという意味の言葉である⁽³⁵⁾。

家事労働である「炊事」の対象にされる「食材」は、米や粟や稗などの穀類であれば人が栽培した田畑から収穫することができ⁽³⁶⁾、大豆や丸豆（まるまめ）などの豆類であれば同じく田畑から収穫することも或いは山野に自生するものを採取することもでき、同様に、ネギやノビルやアサツキなどの菜類についても収穫し或いは採取することができたと考えられる。このうちの「ネギ」に関しては、約1万3000年前の縄文時代初期における炭化したもの（鱗茎の部分。「りんけい」とは地下茎の一部で球形の部分のこと）が宮崎県都城市の王子山遺跡で発見されたといわれている⁽³⁷⁾。

現代のわが国では、炊事の対象とされる物は一般的に「食材」と呼ばれるようになり、料理学校のクッキング・コースなどにおいても食材という言葉がよく使われるようになっている。また、病院などの医療機関においてもよく使われるようになっている。たとえば、大学病院の消化器内科において、潰瘍性大腸炎（これは難病の一種である）の患者に対して、専門の担当医師が「食事に神経質になることはありません。試してダメな食材であればその後に控えればいいんです」と説明する場合などである。しかし、この食材という漢字は和製漢字であって、正規の漢字では「食料」（食物とは食料を調理して食べられるようにした物）と言うのである。

(ウ) 縄文時代の初期において、食材を切揃える道具は一般的には石器であったと考えられている。この当時の石器には各種のものがあって、大きな物を調理する石器としては石斧があり、小さな物を鋭利に調理する石器としては石包丁（いしばうちょう）があり、この石包丁にはガラス質の黒

曜石で作られたものが多かったとされている⁽³⁸⁾。現代では黒曜石は粉末にして断熱材に使用されているが、北海道の十勝地方で産出される光沢の良い十勝石（とかちいし）は装飾品としても使用されている⁽³⁹⁾。そして、黒曜石は信濃国の八ヶ岳周辺や蓼科高原においても産出され、それが甲府盆地を経由して遠く武蔵国にまで運搬されたともいわれている⁽⁴⁰⁾。

炊事法の1つである食材の煮炊きについて、縄文時代には炉穴（ろあな）に土器（縄文土器）を置き、土器に水と共に食材を入れ、下からの炉の火で炊いたと考えられている。このような炉は住居（竪穴住居）の前部や中央部に掘られ、時には住居内に食材を保存するための貯蔵穴も作られたといわれている。かかる貯蔵穴は信濃国の八ヶ岳西麓に広がる縄文中期の遺跡においても見られるとされる⁽⁴¹⁾。

ところが、紀元前3世紀ごろから開始し紀元後3世紀ごろまで継続した弥生時代が終り、文字を使用する有史時代に入ると、炊事方法に重大な変化が生じ、5世紀になると炉に代って竈（かまど）が使用されるようになった。この「竈の文化」は朝鮮半島から伝播したものであり、瞬く間に全国的に普及したといわれている。竈とは「窯処」（かまどころ）の意味であるとされているが、「竈」には鍋や窯（かま）を安定して設置できる大きな穴と、火を焚くのに便利な焚口（たきぐち）があるという特徴があり、住居の内部において持ち運びしうる移動式のものや住居の壁面に作り付ける固定式のものとがあったとされる⁽⁴²⁾。

- (2) (ア) 炊事の対象とされる食材の中心は米や粟や稗などの穀類であるが、わが国においては古代から人々の生業として「漁業」も行われており、水産物も炊事の対象食材にされてきた。わが国での漁業には古来から内陸におけるものと海洋におけるものとがあったところから、炊事の対象食材としての魚類にも内陸性（内水性）のものと海洋性のものとがあった。そして、内陸性の魚類の代表的なものの1つとして「イワナ」があった。これは既述したように河川を遡上したサケが内陸河川に陸封されたものであるといわれている。イワナは関東地方のみならず関西地方にも生息するこ

ろから、かつては関西地方の河川にもサケが産卵のために遡上した事実があったことになる。

関東地方においても関西地方においても、イワナが生息するのに適している河川は、上流域の河川であって清流で水温の低いものに限定されている。そして、信濃国の梓川や奈良井川も清流であって水温の低い河川であるから、その上流域では古来からイワナが生息していたと考えられる。このうちの梓川の流域には縄文時代からの大規模な集落跡（たとえば、松本市であれば荒海渡遺跡など）が遺跡として存在しており、これらの集落では梓川のイワナが食材にされていたと推定されている⁽⁴³⁾。

(イ) 炊事の対象食材である魚類には、海洋性のものとしてのマグロ（古名はシビ）がある。マグロはカツオと同様に海洋を広く回遊する回遊魚であるから、内陸において捕獲することは不可能である。しかし、煮炊きされたマグロ（シビ）の食肉が内陸に運搬され、古代人の集落跡の遺跡から出土することがないわけではない。信濃国の古代遺跡から出土したマグロの食肉は現在までのところないようであるが、全国の縄文遺跡から出土した食材の記録中には、獣類であるウサギやイノシシに関するものとともに、魚類としてのイワナやマグロ肉も記載されている⁽⁴⁴⁾。

魚類の中にはサケのように海洋性と内陸性の双方の性質を有するものがある。同様に、シシャモも秋の産卵期に河川を遡上するところから、海洋性と内陸性の両方の性質を有するものといえることができる。また、魚類の中には、本来は海洋魚であったが、内陸に陸封された結果として淡水魚になった例もある。たとえば、前述したイワナのほかにマスがあり、カラフトマスやサクラマスは海洋魚であるがベニマスは淡水魚である。

(ウ) サケやマス（カラフトマスなど）は古代から北海道の近海に豊富に生息し、本州地方ではすでに弥生文化が伝播し水田耕作が一般化した時期においても、北海道ではサケやマスの魚類を捕獲して生活する文化が一般的であったと言われている。また、同様に、この時期において沖縄その他の南方諸島でも魚介類を採集して生活するのが一般的であったとされる。

前者は「縄文文化」と呼ばれ、後者は「南島文化」と呼ばれている⁽⁴⁵⁾。

このように、古代の北海道における文化と沖縄を含む南方諸島の文化とは類似するところから、従前からアイヌ人と沖縄人との人種的関連性が指摘されてきた。しかし、客観的な根拠が十分に存在しないために、両者の関連性を肯定することは疑問であるとされてきた。ところが、昭和50年代に至り、南西九州から沖縄一帯にかけて存在し風土病の一種とされてきた血液の病気がヴィールス（成人T細胞白血病ウィルス）による疾病であり、北海道のアイヌ人にも同様のウィルスにより成人T細胞白血病に罹患する者の多いことが判明した。

そして、本州地方がすでに弥生文化に移行した時代においても、北海道と沖縄を含む南方諸島はなお縄文文化を継承していたのであるから、これらのことを併せ考えると、アイヌ人と沖縄人等との人種的同一性の可能性がきわめて高く、アイヌ人と沖縄人等の祖先はともに縄文人であったと判断する見解が有力になってきたのである。しかし、アイヌ語と沖縄語とは文法体系が相違する点をどう説明するかという問題がなお残るが、沖縄語は従来の発音体系を残しながら、文法体系はアルタイ語（朝鮮語）の体系を取り入れたものと考えられるのである。

(㌥) 東京湾はかつては「江戸前」（江戸の前方の海という意味）と呼ばれ魚介類の宝庫であった。このことは縄文時代においても同様であったと想像され、モース（Edwarb Sylvester Morse）によって発見された縄文時代後期以降のものとされる「大森貝塚」もこのことを物語るものと考えられる。そして、このようなことは、徳川幕府が開設された1600年代の当初から幕末の1800年代後半に至るまでも同様であったと考えられる。

ところが、時代が下り、昭和時代を経て平成10年代に入ると事態が一変したのである。すなわち、「東京、神奈川、千葉の3都県に囲まれた東京湾は、江戸時代からノリやアサリ、ハマグリなど多くの魚介藻類を生産してきた。しかし、高度成長期に埋め立てが進み、汚染、赤潮などの発生で漁業は衰退。1960年には年に約14万トンあった漁獲量が、3年前〔平成13

年のこと〕からは2万トンを割り込んだ」のである⁽⁴⁷⁾。

これらの魚介類のうちの「ハマグリ」に関しては特に影響が大きく、「〔日本にもとから生息する在来種のハマグリは〕波の穏やかな内湾の干潟にのみ生息し、60年代までは各地でたくさん採れた」が、「高度経済成長期の開発で干潟が埋め立てられ、水質汚染なども重なって生息環境が失われてしまった」のである。そして、「60年代に3万トンを超えた年もあった……が70年代には数千トン、最近では1千トン以下に落ち込んで〔しまった〕」。その結果、政府の環境省は平成24年8月にハマグリを絶滅危惧種Ⅱ類に指定するに至ったのである⁽⁴⁸⁾。

このような事態が原因して、関東地方に居住する若年層の人々の「魚離れ」と「肉指向」の傾向が強まったが、魚離れの傾向は若年層に限らず、70歳以上の世代をも含む全世代に見られるようになった。しかも、かかる傾向は若干の相違はあるとしても、全国的な傾向であると考えられている。魚離れと肉指向すなわち魚食の減少と肉食の増加は、「魚の味に親しみ、〔魚を包丁で三枚に下ろす等の〕調理法もよく知る年配の世代でも魚離れが起きていた。年を取ると肉より魚が好きになる『加齢効果』が言われてきたが裏切られる結果になった」のである⁽⁴⁹⁾。しかし、他方で、「世界が魚を食べ始めた」とも言われている⁽⁵⁰⁾。

(オ) 内陸性であるイワナにせよ、海洋性と内陸性の双方の性質を有するサケにせよ、保存食として加工するためには内臓を除去した後に屋内の炉で焙って燻製にし或いは屋外の天日に干して塩鮭にして保存食にすることができる。これに対して、調理して生食する場合や、火で焼いたり煮たりして食する場合には、鋭利な包丁で魚肉を切り揃えることが必要になる。そして、鋭利な包丁としては古代の縄文時代には黒曜石の石包丁が使用され、有史時代には青銅や鉄などの包丁が使用され、現代では鋼鉄（炭素鋼のこと）やセラミックスなどの包丁が使用されている。

このほかに、鋼鉄（steel）の一種であるがクロム鋼を含有する特殊鋼であるステンレス・スチール製の包丁もある。ステンレス・スチールは防

銹鋼ないし不銹鋼であり便利ではあるが、ステンレス製の包丁は切味が鋼鉄製の包丁に劣るとされる。これに対して、セラミックスの包丁は切味では鋼鉄の包丁に劣ることはないと言われるが、衝撃や打撃に弱いという欠点があるとされる。この点は黒曜石の石包丁に関しても同様のことを指摘することができ、黒曜石の包丁はきわめて鋭利ではあるが衝撃などには弱いといわれている⁽⁵¹⁾。

このように見て来ると、食材としての魚類の調理方法に関しては、使用される包丁の材質に変化が見られたものの、燻製にして保存食にするか、食用にする場合に生食するか煮焼して食するか、生食する場合に背骨を下して二枚の魚肉（三枚おろし）にするか、大きな切身（さく）にした上でさらに細かく切って刺身にするか、等々に関しては古代と現代とで基本的な違いはない。このことは穀類の調理方法が5世紀前後において「炉から竈への変化」というエポック・メイキングな変革を遂げたこととの対比において、きわめて特徴的であるとともに興味深いことであると指摘することができる⁽⁵²⁾。

- (3) (ア) 同じく家事労働ではあるが、育児や炊事に比較して雑事的性質の強いものに「掃除」と洗濯がある。しかも、掃除には、日々の労務の提供に関連して反復・継続して行われるものと、年間を通して数回ほど行われるにすぎないものがある⁽⁵³⁾。前者の類型に属する掃除としては厨房（台所）の掃除があり、後者の類型に属するものとしては年に一度の大掃除がある。この厨房の掃除には、食材である豆類や野菜類を包丁で切り揃える作業に伴って不要になった部分を処分する作業も含まれる。宮崎県の王子山遺跡から出土したネギの「鱗莖」などもこのようにして処分されたものと考えられる⁽⁵⁴⁾。

古代における家事労働としての炊事のうちには、包丁（石包丁）で切り揃えた食材を必要に応じて煮炊きする労務の提供が含まれていた。この当時の煮炊きする道具は土器の鍋や壺やこれを加熱する炉であったが、古墳時代の5世紀ごろに朝鮮半島から竈（かまど）が伝来し急速に炉に取って

代わることになった。このことはすでに述べたところである。しかも、この竈には住居の壁面に作り付ける固定式のものがあり、これは普及の過程において徐々に大型化し、これによって火力が増加するとともに煙の中に含まれる煤に原因する住居の汚染の度合いも大規模になったと想像される⁽⁵⁵⁾。

(イ) 時代が弥生時代になり稲作耕作が普及したことに伴って、水田を多く所有・耕作する富裕層とそうでない非富裕層とが発生し、わが国の社会は部分的ながら階級社会になりこのような傾向はその後にも継続することになった。そして、時代が3世紀から6世紀までの古墳時代を経て奈良時代になると、住居として高床（たかゆか）住居と平地（ひらち）住居とが一般化し、これらの住居においても大型化した竈や甕が使用されるようになり、住居の大掛りな掃除の必要性も増加したと考えられる。高床住居も平地住居も柱を使用した住居であり、非富裕層に属する人々の多くは平地住居の土間に藁や筵などを敷いて生活していたようである。

富裕層に属する人々は山上憶良をも含めてそれなりに裕富であったが⁽⁵⁶⁾、非富裕層に属する人々は租・庸・調などの租税の納税に苦しみ、その生活は日々の食材にも事欠く悲惨なものであったと考えられている。このことに関して山上憶良の貧窮問答歌には以下のように記述されている。「伏せ盧（いお）の、曲げ盧の内に、ひた土に、わら解き敷きて、父母は枕の方に、妻子（めこ）どもは足の方に、囲み居て憂えさまよい、竈（かまど）には火気吹きたてず、甕（こしき）には蜘蛛の巣かきて、飯かしくことも忘れて」と。

この情況は、倒れかかって曲った小屋の中の土間に、稲の穂の部分がない藁を敷きつめ、米もないので竈の火を着けることもなく、米を蒸すための甕には蜘蛛が巣を張っている、というものである⁽⁵⁷⁾。これは、食材がなく炊事することが出来ないので、煤を掃って掃除をする余地も必要もないというきわめて悲惨な情況のことであり、憶良が生活していた当時の奈良における非富裕層の人々の現実の情況に近いものであったと想像する

ことができる。

(ウ) 古今和歌集の編者の1人である紀貫之は憶良より約200年後に活躍した著名な歌人であるが、官職に関しては恵まれなかったと言われている。土佐守に任命された後に「木工権頭」にも任命されているが、貫之が土佐守として任地の土佐国に出発したのは西暦930年前後と推定され、任期4年のあいだ任地である土佐国に赴任していたとされている。土佐国は京都から極めて遠い国であり、正六位下相当の官職であったとされている⁽⁵⁸⁾。

貫之が京都を出発したのは930年ごろと推定されるので、4年の任期を満了して京都に帰郷したのは935年前後のことと推認される。土佐日記は、任期中の生活状況に関しては何ら触れることなく、和泉国を経て京の都に戻るまでの55日間について1日も欠かさず記録した日記である。平成の現代において遠地に数年にわたり赴任する場合には単身赴任のことも多いが、貫之の帰京の船旅は「一族郎党を引き連れて都へ戻る」旅であって大事業であったとされている。しかも、船が瀬戸内海に入ってから瀬戸内海を跳梁する海賊の恐怖があったとされている⁽⁵⁹⁾。

憶良も貫之も律令制によって任命された国司であり、平成の現代における都道府県知事に対応する存在である。しかし、国司は中央官庁の官吏が地方官に任命されたものであるから相違する点があり、強いていえば近代の明治時代における都道府県長官ないし官選知事に類似する存在であったと考えられる。明治時代の都道府県長官等は、現代の都道府県知事と相違して中央官庁が任命し、任期満了にあたっては任地を変更して更に任命されることがあったからである。

このような明治時代における都道府県長官等も、その者の本来の住所に居宅が存在する場合には、任地へ赴任する際に自宅の管理を有償または無償で他人に委託することがあったと想像される。そして、貫之も「中垣（なかがき）こそあれ、一つ家のやうなれば」その居宅の管理を隣人に委託したのである。そして、このような管理委託は「〔隣人が〕望みて預かれるなり」とされているのでほぼ無償であったと想像される。そのために、

貫之は「さるは、便りごとに、物も絶えず得させたり」というのである。

ところが、「家にいたりて、門に入るに、月明ければ、いとよくありさま見ゆ。聞きしよりもまして、いふかひなくぞ、こぼれ破れた〔り〕」という状況に驚き、また、「池めいてくぼまり、水つける所」の際にあった対の松の一方が枯れて無くなっているとも嘆いている。しかし、居宅の屋内の掃除の状況には何も触れていない⁽⁶⁰⁾。平成の現代においても、官吏などが転任にあたり居宅の管理を隣人に委託することがあるが、屋内の掃除は容易であっても風雨に曝される建物や樹木の管理はきわめて困難な一面があり、このことは無償委託の場合には一層そうであると考えられる。

- (4) (ア) 自然人は出生した直後の乳児や幼児の時期（乳幼児期）には1人で生活することができない（自立できない）から、必然的に父母やその他の家族などによる介護（乳幼児介護。育児介護ともいう）を受けることになる。その後に自然人は成長して成人になり、さらにその後に加齢して老人になる。そして、老人になった自然人は、加齢に基づく老衰によるにせよ加齢に伴う疾病によるにせよ、介護（老人介護）を受ける必要の生ずることがある。このことは縄文時代の先史時代から平成時代の現代に至るまで基本的には同様である。

この縄文時代において、零歳の自然人が何歳まで生存しうるかという平均余命すなわち「平均寿命」が、どの位の長さであったかは正確には判断の仕様がなない。しかし、この時代にあつては、内陸部におけるにせよ海岸部におけるにせよ、豊富な食材が容易に入手し得たと考えられ、他方で、中国大陸や朝鮮半島との人的交流が少なく、外来の病原菌が伝播する可能性が少なかったと考えられるので、縄文人の平均寿命は以外に長かったと推定されるのである。

ところが、弥生時代に入るに及んで、朝鮮半島などから稲作文化が伝来するとともに、弥生人が保有していた結核菌も日本列島に伝播したと考えられている。このことに関連して、「医史学」の観点からの以下のような指摘がある。「〔日本は島国であり〕外国から多くの伝染病が入ってきた。

結核は稲作が伝わった頃にやって来た。外からの人の往来が盛んになるにつれて天然痘、赤痢、麻疹が現れた」と⁽⁶¹⁾。また、以下のようにも指摘されている。「結核は縄文時代には国内に入っていなかったというのが通説である。結核は文化とともに、先進国から入ってくる病気」であり、「大陸からの文化が入ってきた弥生時代になって現れたのである」と⁽⁶²⁾。

(イ) すでに、奈良時代においては、中国大陸や朝鮮半島から渡来した弥生人によって伝播された結核菌によって、乳幼児はいうまでもなく成人した男女や老人の中にも、結核に罹患した多数の者が存在したと考えられている。これらの者の内で自立しえない者については、この当時においても必要な介護（乳幼児介護・成人介護・老人介護）が家族や隣人によって行われたといえる。他方で、家族などによる私的介護を受けられない者には、公的な介護措置が実施されたと考えられている。その典型的な一例が光明皇后のイニシアティブの下に実施された悲田院と施薬院の制度である。

奈良時代の自然人の平均寿命がどの位であったかは正確には不明である。しかし、この時代における著名な歌人はかなり高齢になるまで生存したのである。たとえば、大伴旅人であり、山上憶良であり、大伴家持である⁽⁶³⁾。また、平安時代の歌人である紀貫之も一説によれば79歳で没したのではないかとされている。他方で、奈良時代以前における自然人でない企業体の中にも、極めて長期間にわたり存在し営業しているものがある。その一例が建設企業の「金剛組」であり、他の一例がホテル企業の「温泉旅館慶雲館」である⁽⁶⁴⁾。

(ウ) 紀貫之の土佐日記の完成したのが西暦935年ごろと推定すると、清少納言の枕草子が完成したのは約65年後の西暦1000年ごろではないかと推定される。この中で清少納言は「病は、胸、もののけ、あしのけ、はては、ただそこはかたなく物食はれぬ心地」と記している。ここにいう「病は、胸」とは胸部疾患のことであり、現代における心疾患をも含むが多くは肺結核のことであると指摘されている⁽⁶⁵⁾。そして、江戸時代の元禄時代に

においても肺結核に罹患した若年の女性が多かったといわれている。

このような状況は江戸時代が終り明治時代に入っても同様であったとされる。すなわち、「農村から集まった女子工員が結核に感染して、彼女らが郷里に結核を持ち帰り、農村地帯に結核を広げ、悲惨な結果をひこおこしていたのである」と。しかし、「工業国の立国を急いでいた政府は、女子工員の結核を問題にする余裕がなかった」とされる。そして、「政府が本腰を入れて対策に乗り出したかに見えたのは……工場法を制定したときであった」という⁽⁶⁶⁾。

(ㄱ) 明治時代の岡谷（長野県諏訪郡平野村）は明治政府の国策としての製糸産業により繁栄した町村であるという明るいイメージと、女工哀史に象徴される暗いイメージとの双方のイメージを共有する町村であったが、江戸時代の岡谷（信濃国諏訪郡岡谷村）は宿場町として栄えた町村であるとともに製糸業（糸取りの作業）によって栄えた町村でもあった⁽⁶⁷⁾。信濃国は全体として気候の厳しい地帯であるが、岡谷村は諏訪湖に面しており、信濃国の中では温暖な地域であったと考えられる。そして、この岡谷村に江戸時代の初期のころに永田徳本（ながた・とくほん）という医師がいた。

この徳本は隣国の甲斐国に居住していた名医であり、ブドウの薬効に着目して自らもブドウを栽培するとともにブドウの搾汁（しぼりじる）を薬剤として患者に処方し自らも常日頃から飲用していたとされる。このようなブドウ汁の薬効は現代でいう「レスベラトロール」という成分によるものと考えられている。徳本は首から薬袋（みない。薬を入れる袋のこと）を下げて牛に乗り諸国を廻り患者を治療したといわれているが、晩年は岡谷村に移住し118歳まで長生きしたといわれている⁽⁶⁸⁾。

(ㄴ) 家事労働のうちの掃除に類似して雑事的性質の強いものに「洗濯」がある。掃除には、家屋の一部である厨房などに関して部分的に行われるもののほかに、家屋の全体について大規模に行われる非日常的な大掃除などもあるが、洗濯に関してはこのような規模の大小の違いは明確には見ら

れず、洗濯は日常的で一般的な作業であるといえることができる。すなわち、「洗濯」とは水（「さんずい」は水のこと）を利用して各種の汚れを洗い濯（すす）ぐことであると理解することができる⁽⁶⁹⁾。

(二) 洗濯は水で汚れを洗い濯ぐことであり、汚れを洗い濯ぐために使用される水は基本的には炊事に使用される水と同様の水である。このことは縄文時代や弥生時代や奈良時代からもそうであったと考えられる。住居付近に湧水があれば、そこから汲んだ水の一部が炊事に使われ、残部が洗濯用に使われたと考えられる。たとえば、信濃国の井戸尻遺跡では、かつて地下水による井戸（水場）があつて、この井戸水が食材の調理用水であるとともに衣類などの洗濯用水でもあり⁽⁷⁰⁾、また、武蔵国の多摩丘陵地帯には多摩川の伏流水の湧出による自然湧水池が各所（学校法人・玉川学園の校地内の奈良池など）にあり⁽⁷¹⁾、これが調理用水であるとともに洗濯用水でもあったのである。

そして、平成の現代でも、わが国では一般的に水道上水が調理用水であるとともに洗濯用水でもある。しかし、江戸時代における江戸の市街地では事情が相違し、徳川家康が江戸城（旧江戸城）に入城した当時の調理用水と洗濯用水はともに各地の井戸水であったが、江戸の下町の井戸水は水質が悪かったために、家康は幕府の政策として飲用水や調理用水として上水を新たに建設したと言われる。それが井之頭池を水源とする神田上水（神田川）であり或いは玉川上水であったのである⁽⁷²⁾。

洗濯は基本的に水で行うものであるが、汚れを洗い濯ぐ対象とされる対象物（洗濯対象物。洗濯物。せんたくもの）は多種多様であり、そのうちでも最も一般的なものは衣類である。そして、単に「洗濯」といえば衣類の洗濯を意味することが多い。たとえば、「天気がよくて、洗濯物がよく乾く」とか「天気が悪いので洗濯物が乾かない」という場合の洗濯などである⁽⁷³⁾。しかも、洗濯は時には人の心身の汚れを洗い濯ぐために行われることもある。このうちの心の汚れを対象にする場合には「心を洗い浄める」とも表現される。

(㇆) 沖縄県石垣市の尖閣諸島の1つの魚釣島（魚釣台）に関して台湾漁民の1人の以下のような談話がある。「島の周りは海底が凹凸で、北上する黒潮に乗って来たサバが集まる所だ。いくらでも釣れた」。「沖縄からも漁船が来ていて、互いに手を振ってあいさつをした。〔昭和45年ごろの当時〕中国の漁船は見かけなかった」。そして、「魚釣島の北海岸にはたびたび上陸した。そこには山から流れ落ちてくる水がある。漁船のエンジンは水を多く使い、補給が必要だった。漁師らは水浴びもした。沖縄の漁民が残したらしい鍋が転っていた」と⁽⁷⁴⁾。ここでいう「水浴び」とは単に体を洗うための行為であったと考えられる。

わが国では古くから禊（みそぎ）という行為が行われていたが、この行為は、水で心身の汚れを洗い浄める行為であって、川においても海においても行われたものである。この禊が川において行われる場合には、その川は特に「禊川」（みそぎがわ）と呼ばれ、これらの行為を教義として体系化する場合には、その教義は禊教（みそぎきょう）と呼ばれた。禊教を創唱したのは江戸時代に活躍した井上正鉄（いのうえ・まさかね）であるとされるが、禊をする行為はすでに万葉の時代にも行われていたとされている⁽⁷⁵⁾。

注

- (1) 松村明・大辞林〈第3版 平成18年〉の「家事」の項目においては、「炊事・洗濯・掃除・育児など、家庭生活に必要な仕事」と説明されている。この説明は第1版〈平成元年〉における説明と全く同一の表現である。
- (2) 西尾実＝岩淵悦太郎・岩波国語事典〈第1版 昭和38年〉の「家事」の項目においては、「家庭生活をいとなむための雑事。そうじ・炊事・せんたく・育児など」と説明されており「雑事」に言及されているが、ここでは「育児」も家事に含めている。
- (3) かつて家事労働という概念と家内労働という概念とが混乱して使用されたのは、「家事」という言葉の意味が曖昧であったことに原因するものであったが、この「家事」という言葉は和製漢字ではなく正規の中国漢字である。

そして、このことに関連して、服部宇之吉＝小柳司気太・改訂増補詳解漢和大事典507頁は「家事」について「いへの内のしごと、家庭の用事」と説明した上で、「李商隠雑纂 失本體」中の「失家事」（家事を失う）という表現を引用している。

- (4) 小稲義雄・新英和大辞典〈第5版 昭和55年〉1023頁。この英和大辞典は全体で約2500頁から成っており、昭和50年代における最高の英和辞典として評価され位置づけられていたものである。英米文学者はいうまでもなく法学者その他によっても広く利用された。

- (5) 田辺宗一・金子稔外2名・新和英中辞典〈第5版〉327頁参照。

しかし、この新和英中辞典とセットをなす竹林滋ほか3名・新英和中辞典〈第7版〉885頁では、housework の訳語としては単に「家事」という訳語が記述されているにすぎない。

新英和中辞典の初版は岩崎民平ほか4名によるものであり、昭和42年に初版が出版されてから平成15年までの36年間に実に累計で1200万部を売り上げたという名著である。そして、この初版本の housework の項目には「家事（洗たく・掃除・料理など）」という訳語が収録されており、しかも、対照されるべき言葉として homework が指摘されていた。

- (6) homework が内職や家内工業を意味することについては、小稲・前掲辞典1009頁参照。しかし、竹林ほか3名・前掲新英和中辞典872頁では、宿題や予習という訳語は記載されているが、内職や家内工業という訳語は記載されていない。

- (7) 鈴木信太郎ほか8名・スタンダード佛和辞典（旧スタンダード佛和辞典）〈第8版〉966頁。この辞書も古語の意味を正確に記述している点などから名著とされている辞書である。そして、「新スタンダード佛和辞典」を基準にして編集されたものに石井晴一ほか6名・ジュネス佛和辞典があり、これには文法要覧・フランス人名・日本語索引（簡単な仏和辞典のこと）などが付録として付加されている。そして、家事（ménage）という名詞や、家事の（ménager）という形容詞も、ジュネス佛和辞典の日本語索引中に収録されている。

- (8) 石井ほか6名・前掲書782頁は、ménage の訳語として「家事」を記述した後に、これに続けて「〔特に〕掃除」と説明し、用例として「Le ménage n'est pas encore fait. まだ掃除がすんでいない」という一例を挙げている。

- (9) 鈴木ほか8名・前掲書966頁。これに対して、conduire le ménage ではなく fair le ménage といえば、一般的に、掃除や整理や片付けなどをすることを意味し、そして、fair des ménages といえば、さまざまな雑事をすることを意味することになる。ところが、近時の用語法によれば、この後者の fair des ménages とは人員整理をするという意味で使用されることがあるといわれている。

なお、イギリス語では、剰員（余剰人員）は redundancy と言われ、また、整理解雇は redundancy dismissal（dismissal by reason of the redundancy）と呼ばれる。redundancy pay と言えば人員整理手当のことである。

ドイツ語では、合理化（経営合理化）は Rationalisierung と言われ、経営合理化による大量解雇は Massenentlassung と呼ばれ、労働者が経営合理化に同意しない場合になされる変更解約告知は Änderungskündigung と呼ばれる。

- (10) 石井ほか6名・前掲書783頁。

- (11) 鈴木ほか8名・前掲書612頁によれば、古語としての domestique には「家」とい

う意味があり、animal domestique といえは家の動物すなわち「家畜」という意味になる。また、石井ほか6名・前掲書393頁によれば、domestiquer という動詞には「(動物を) 飼い馴らす」すなわち「飼育する」という意味があるとされている。

- (12) 相良守峯・大独和辞典〈第1版 昭和33年〉666頁。

この辞書は約4年の歳月を費して昭和33年に出版されたものであり、その時点から平成の現代までの間に約50年が経過した。そして、この過程において、大形の独和辞典が何種類も出版された。しかし、そのいずれもこの大独和辞典を凌駕するには至っていないとされている。

- (13) 木村謹治＝相良守峯・独和辞典〈改訂版 昭和38年〉675頁。この独和辞典は、木村＝相良・独和辞典〈第1版 昭和15年〉を全面改訂したものである。

ドイツ語の Hausarbeit には、イギリス語の housework に類似して、自宅での勉強や宿題という意味もある。しかし、フランス語の ménager にはこのような意味はない。

- (14) 木村＝相良・前掲書(改訂版) 676頁では、Hausehre (本来の意味では「家の名誉」という意味) という表現が、Hausfrau の軽蔑的表現として用いられることが多いと説明されている。

このことに関連して、国松孝二ほか11名・独和大辞典〈コンパクト版〉995頁では、Hausfrau を「(一家の) 主婦、女主人」と翻訳し、994頁では Hausehre を「(家の名誉としての) 主婦」と翻訳しているにすぎない。

- (15) eine gute Hausfrau は、国松ほか11名・前掲書995頁では「所帯の切り盛りのうまい主婦」と翻訳され、eine schlechte Hausfrau は「所帯の切り盛りのへたな主婦」と翻訳されている。

- (16) ナチス時代とは、一般的に、授權法(Ermächtigungsgesetz)が制定された1934年3月24日から、ドイツが無条件降伏した1945年5月8日までの時期をいうと理解されている。

- (17) 山田晟・ドイツ法律用語辞典〈改訂増補版 昭和55年〉310頁以下。

- (18) ライヒ労働裁判所とは、ワイマール共和国時代に設立された労働事件を管轄するライヒの特別裁判所のことである。山田・前掲書523頁。

- (19) 小西・国際労働法234頁。

- (20) 1963年1月8日に制定された後における直近の改正は、約40年後の2002年5月7日法によってなされた改正である。

- (21) 旧法804条は1項において「日常ノ家事ニ付テハ妻ハ夫ノ代理人ト看做ス」と規定した後に、2項において以下のように規定していた。

「夫ハ前項ノ代理権ノ全部又ハ一部ヲ否認スルコトヲ得 但 之ヲ以テ善意ノ第三者ニ対抗スルコトヲ得ス」と。

- (22) 「解釈の基準」を定める現行民法の2条中にも、「個人の尊厳」という文言と「両性の本質的平等」という文言が見られる。

- (23) 我妻栄・立石芳枝＝親族法・相続法〈第1版第16刷 昭和36年〉113頁・115頁・117頁参照。

- (24) 我妻＝立石・前掲書115頁参照。
- (25) 東季彦・全訳独逸民法361頁の訳文による。
- (26) 我妻＝立石・前掲書115頁も、民法761条について、「夫妻の一方が『日常の家事に関して』第三者から、物を買ったとか借りたという場合である。日常の家事に関するといいうものの中には、例えば食料品その他日用品の購入、家賃、地代、電気代、燃料代などはもちろん含まれる」と述べて、「日常の家事」すなわち「家事の内容」を広く理解している
- (27) 相良・前掲書667頁は、Hauswesen とは「総称的な概念である」とした上で、「家事、家政、世帯」と翻訳している。また、国松ほか11名・前掲書996頁は、「集会的」な概念であるとした上で「世帯」または「家政」と翻訳している。さらに、シンチンゲルほか2名・現代独和辞典469頁は単に「家事」と翻訳している。なお、Wesen それ自体は実体とか人柄とか事柄という意味の言葉である。
- (28) ドイツ（西ドイツ）においては1949年にボン基本法が制定され、その3条1項が「すべての人は法律の前に平等である」と規定し、さらに、2項が「男子および女子は、同権である」と規定したことに基づいて、1957年6月18日に「男女同権法」が制定され、翌年の1958年7月1日から施行された。この法律の正式名称は Gesetz über die Gleichberechtigung von Mann und Frau auf dem Gebiete des bürgerlichen Rechts すなわち「市民法の領域における男女の同権に関する法律」というものであり、この法律によって BGB 中の男女不平等の規定が改正された。この男女同権法の制定は1949年にボン基本法が制定された約8年後の1957年のことであった。
- (29) 東季彦・前掲書360頁参照。
- (30) 神野志隆光・万葉集鑑賞事典179頁参照。
- この和歌は、「子守に帰るのだ」という意味が込められた歌であろうと解説されている。
- なお、「それ」は歌の中では「其」と表記されているが、これは漢文における強調文字である「其」に倣ったものとされている。憶良は漢文が堪能であったと言われている。
- (31) この一首には「思子等歌一首」（子らを思う歌一首）という表題がつけられている。
- (32) 全国歴史教育研究協議会・日本史用語集35頁参照。
- (33) 巻20の巻末歌（巻20・4516）すなわち万葉集最後の和歌の約20首前の和歌は「初春の、初子（はつね）の今日の玉簪（たまばはき）、手に取るからに揺らく玉の緒」という家持自身の和歌であり、巻末歌も家持自身の和歌である。神野志・前掲書245頁以下参照。「初子」とはその月の最初の「子」（ね）の日のことであるが、特に正月の初子の日は目出たい日とされたと言われている。なお、「玉簪」とは玉を飾った「ぼうき」のこと。
- (34) 松村・前掲書1316頁では、単に「食べ物を煮たきすること」とだけ説明されている。
- (35) クッキー（cookie）は言うまでもなく「焼いた菓子」という意味の言葉であり、漢字の「炊事」という言葉も「食材を炊（かし）ぐ仕事」という意味である。
- (36) 信濃国のハヶ岳山麓では、縄文時代の中期に、粟や稗や芋類の焼畑農業が行われて

いたと推定されている。全国歴史教育研究協会・前掲書4頁参照。しかし、同じく信濃国のハヶ岳山麓（ハヶ岳南麓）にある井戸尻遺跡の発掘調査の結果によると、焼畑農業ではなく常畑農業がすでに行われていたと推定されている。ハヶ岳西麓の遺跡については注(41)を参照。

- (37) 朝日新聞平成24年3月27日〈朝刊〉37面参照。この遺跡では、「火を使ったとみられる深さ30センチ～1メートルの『炉穴』約30基も見つかった」という。

また、炭火したネギは「野生種とみられ、現生種のノビルやアサツキに近い」とされ、しかも、「炉穴周辺では炭化したドングリの双葉53点もあった」という。

- (38) 全国歴史教育研究協議会・前掲書5頁によれば、青銅や鉄で作られた金属器は弥生時代以後に見られるようになったという。
- (39) 松村明・前掲書893頁および798頁参照。
- (40) 宮田太郎『『古街道』のある里山景観』多摩ら・び2011年10月号6頁。
- (41) 長野県立歴史館作製の「信濃の歴史と風土⑦ 食——とる・つくる・たべる」には、「復元した縄文人の食事」の写真が掲載されており、その中には「炉」の写真と「イワナ」の燻製の写真が写っている。松本市立博物館「考古館新聞」49号2頁参照。
- (42) 若狭 徹「考古学から見た韓流ブーム」書斎の2012年3月号57頁は「日本家屋の火処——特に厨房施設——は、旧石器時代からずっと炉であったが、5世紀には伝来したばかりの竈〔かまど〕に首座を譲る〔ことになった〕」と記述している。
- (43) 松本市立博物館・前掲新聞2頁参照。
- (44) 松本市立博物館・前掲新聞同頁参照。
- (45) 全国歴史教育研究協議会・前掲書4頁以下参照。
- (46) 「江戸前」という言葉は多義的であり、様々な理解の仕方があることについては、小西・理代社会と法〈第2版〉98頁以下。
- (47) 朝日新聞平成16年2月2日〈夕刊〉1面参照。
- (48) 朝日新聞平成24年9月21日〈朝刊〉2面。現在スーパーマーケットなどで売られているハマグリは中国から輸入されたシナハマグリが多いが、在来種であるが干潟でなく外洋に面した海岸でも採れる「チョウセンハマグリ」も比較的多く売られているとされる。
- (49) 朝日新聞平成24年4月4日〈夕刊〉1面。
- (50) 田中邦彦「新しい漁業、一緒にやろう」朝日新聞平成24年4月19日〈朝刊〉13面参照。
- (51) わが国では黒曜石の石包丁がハヶ岳山麓の縄文時代遺跡（黒曜石それ自体はハヶ岳山麓以外にも北海道などでも産出される）などから出土しているが、南半球の中央アメリカで4世紀から9世紀にかけて繁栄したマヤ文明（マヤ族は紀元前後に出現したという）の遺跡からも黒曜石のナイフなどが出土したといわれている。朝日新聞平成24年9月6日〈朝刊〉31面参照。
- (52) 若狭・前掲論文は「竈」の上部に載せる「甑（こしき）」について以下のように記述している。「甑は5世紀から大型化が進み、量も増加して厨房道具に欠かせないものとなった。餅米の調理をはじめ、蒸し料理が食卓を賑わせるようになった」と。

- (53) 掃除の本来の意味は、拝（はら）い清めて取り除（のぞ）くこと、という意味であるとされる。服部＝小柳・前掲書752頁および186頁参照。
掃除という言葉は正規の漢語であり、現在の中国でも「シャオ・チュ」（大掃除はダ・ シャオ・ チュ）と発音されている。
- (54) 前掲・注(37)参照。
- (55) 若狭・前掲論文57頁参照。
- (56) 山上憶良は百済からの渡来人の子孫であると言われているが、皇太子時代の聖武天皇に仕え、また、遣唐使に随伴し書記官として入唐した経歴があり、無位（冠位が無いこと）から立身して「従五位下」になったとされる。神野志・前掲書191頁。従五位下の位は最初に授かる位であるが、従五位下になると貴族階級の一員になるという。
- (57) 神野志・前掲書186頁参照。
- (58) 土佐日記の作者である紀貫之も延喜17年（西暦917年）に「待望の叙爵を果し……た」とされる。この「叙爵」（じょしゃく）とは従五位下に叙せられることであり、その後、貫之は延長8年（930年）に土佐守の官に任ぜられたのである。西山秀人・土佐日記（全）199頁。
- (59) 西山・前掲書3頁参照。なお、土佐日記は平仮名で記述されており、この平仮名は平安時代初期（西暦900年ごろ）に完成されたといわれていたが、最近の考古学の発掘結果では800年代後半（850年ごろ）にはすでに完成していたとされるようになっている。朝日新聞平成24年11月29日〈朝刊〉1面参照。
- (60) 西山・前掲書186頁以下参照。
平成の現代において、各種の事情によって無人になった空家が増加しており、中には倒壊の危険があるものもある。しかし、管理委託を受けていない隣人には手の下しようがないのである。家屋や樹木の修理や手入は素人には困難なことが多く、専門家に依頼すればその費用を誰が負担するかという問題が直ちに生ずるからである。
平成の現代における空家の増加に関連しては、問題解決のために各地の地方自治体（都道府県や市町村）がそれぞれ条例（空き家対策条例と言われる）を制定し問題の解決にあたっている。空家の数は平成20年において全国で約757万戸に達しているとされる。その原因は、山間部などでは地域全体が過疎化したことにあるが、都市部でも住民が高齢化し老人介護施設等に入所したこと等が原因と指摘されている。朝日新聞平成24年4月8日〈朝刊〉1面参照。
- (61) 酒井シヅ・病が語る日本史4頁。
- (62) 酒井・前掲書26頁。
- (63) 吉川弘文館・標準日本史年表3頁によれば、大伴旅人は67歳・山上憶良は74歳・大伴家持は68歳で没したのではないかとされている。
- (64) 金剛組は、西暦578年に百済から寺院建築の技術を伝えるために招かれた3人の工匠のうちの1人が創業した企業であり、慶雲館は西暦705年に創業された世界最古の甲斐国の「ホテル」であり、ギネスブックにも認定されている。久保田章一「日本の100年企業に見る人材活用術」エルダー平成24年1月号7頁。
- (65) 酒井・前掲書260頁参照。

- (66) 酒井・前掲書267頁参照。このような情況は長野県岡谷市や川岸村付近の紡績工場でも同様であったと考えられる。
- (67) 岡谷市・岡谷市史319頁。
- (68) 永山久夫「日本史にみる長寿食」エルダー平成23年3月11日号41頁。
- (69) 服部＝小柳・前掲書1030頁および1100頁参照。同じ意味で濯洗（たくせん。すすぎあらうこと）という漢字もある。
- (70) 「井戸」ないし「井」とは「水場」すなわち水を汲む場所のことである。たとえば、万葉集巻14巻3439の「鈴が音の歌家〔はゆま・うまや。早馬の馬屋のこと〕の堤井〔つつみい〕の水を給へな 妹がただ手よ」という東歌にいう「堤井」とは、水を塞き止めて作った水場のことである。神野光隆光・万葉集鑑賞事典255頁参照。
- (71) 多摩川それ自体の水源地ないし水源域は、山梨県の小菅村（こすげむら）にあるといわれている。この小菅村は道志村・秋山村・丹波村（たばむら）と並び甲斐国の辺境の地であった所であったが、道志村は道志川に鉄橋が建設されたところから現在では東京からの観光地に変っている。しかし、小菅村は現在でも辺境の地である。
- ところが、平成22年ごろから、外国資本（たとえば、香港資本など）が水源地を含む安価な土地を大量に購入する事例が増加し、これに対処するために北海道を初めとする4道県が「水源地保全条例」を制定した。また、現時点において9県がかかる条例を制定することを検討していると言われる。そして、この中に山梨県も含まれているのである。朝日新聞平成24年12月25日〈朝刊〉1面。
- (72) 神田所水や玉川上水については、本稿のⅡの注(8)を参照。
- (73) 田辺宗一＝金子稔ほか2名・前掲書327頁では、「家事見習い」（掃除・洗濯・食事の仕度・育児などを手伝いながら習得しようとする人）について、a person who works as a domestic helper in order to learn the rudiments of house cleaning, washing clothes, meal preparation, and child care と翻訳して、「洗濯」に対応する言葉に washing clothes という文字を当てている。
- (74) 朝日新聞平成24年9月4日〈朝刊〉19面。本文にいう「漁船のエンジンは水を多く使〔った〕」という表現は、台湾から尖閣諸島までは約200キロメートルあり、乗った漁船が15トン級の漁船であって片道15時間かかるので、冷却水を多量に必要とした、という趣旨に考えられる。尖閣諸島の中国名は釣魚島
- (75) 松村明・前掲書2440頁。ここにおいて、「ひさかたの 天の川原に出で立ちて みそぎてましを」という万葉歌（万葉集第420番）が紹介されている。しかし、この万葉歌は神野志・前掲書には収録されていない。

Ⅳ ILO189号条約 ILO201号勧告

1 ILO の設立と各種の ILO 条約

- (1) (ア) 1918年11月のドイツの降伏により第1次大戦が終了した翌年の1919年に、フランスのパリにおいてパリ平和会議（Paris Peace Conference パリ講和会議ともいう。Paris という地名はパリ族が居住していたことに由来するものといわれる）が開催され、有名なベルサイユ平和条約（Versailles Peace Treaty ベルサイユ講和条約）が連合国とドイツとの間において調印された。このベルサイユ条約は第1編として国際連盟規約を包含しており、第13編には労働編が規定されていた。

このうちの国際連盟規約に基づいて国際連盟（The League of Nations）が設立され、イギリス・フランス・ロシア・日本・イタリアの5か国が原加盟国として加盟し、後に敗戦国のドイツが加入加盟国として加盟した。しかし、国際連盟の設立に尽力したアメリカは加入しなかった。そして、ベルサイユ平和条約第13編の労働編に基づいて、国際連盟と有機的に結合している機関として国際労働機関（International Labour Organisation ILO と略称）が設立された。

(イ) わが国は国際連盟の原加盟国の1つであったのでILOの原加盟国でもあったが、1933年3月に国際連盟を脱退（ドイツは1933年10月に脱退。イタリアは1937年12月に脱退）した。そして、わが国は1938年11月2日にはILO事務局長にILOを脱退する旨を通告し、これによって翌々年の1940年11月2日に加盟国としての地位を喪失した。これはILO憲章により事務局長が通告の意思表示を受領した日から2年を経過した時点で加盟国としての地位が消滅するとされていたことによるものである⁽¹⁾。

その後、わが国は1951年6月21日にILOに再加入（国内的には11月26日に国会により承認）した。わが国のILOへの再加入は、1947年にニューデリーで開催された「ILOアジア地域予備会議」が「日本における労働基準に関する決議」を採択し、ILO理事会に日本の再加入の考慮を要

請したことによるものである。そして、わが国は翌年の48年に GHQ に ILO 第31回総会へのオブザーバー派遣の斡旋を依頼したところ GHQ はこれを認めなかったが、翌49年に ILO 総会からオブザーバー派遣の許可が出され、1951年6月の第34回総会において再加入が認められた⁽²⁾。その後、同年の9月には日本の独立に関するサンフランシスコ平和条約が調印されるに至ったのである⁽³⁾。

(ウ) ILO は1919年に設立され、第1回総会が同年の10月29日から翌年の1月27日までアメリカのワシントンにおいて開催された⁽⁴⁾。この第1回総会においては第1号条約である「工業的企業に於ける労働時間を1日8時間かつ1週8時間に制限する条約」が採択されたほかに、第5号条約である「工業に使用し得る児童の最低年齢を定むる条約」も採択された。この両条約はわずか3か月の同一会期期間中に採択されたものであって、これらはその当時のフランスを始めとするヨーロッパの国際社会における緊急な要請に基づくものであった⁽⁵⁾。

このようにして、ILO の総会は原則として毎年1回開催されることになったが、第20回総会は1936年6月4日から6月24日まで開催された後に、同年の10月には第20回総会に続いて第21回総会（10月6日から10月24日まで）が開催せられ、さらに引き続き第22回総会（10月22日から10月24日まで）が開催された。この1936年という年は、ドイツ軍がライン河の東側の非武装地帯であるラインラント（Rheinland）に侵攻した年であり、風雲急を告げる年であった。

(エ) ILO の憲法ともいふべき ILO 憲章 (Constitution of the International Labour Organisation) は、その前文において「育児・年少者・婦人の保護」に言及した後に、「同一価値の労働に対する同一報酬の原則の承認」が急務であると定めている。この原則は ILO 憲章が1946年に改正された際に憲章前文に取り入れられたものである⁽⁶⁾。しかし、その後この男女同一報酬の原則を具体的に保障する ILO 条約や勧告は存在せず、この問題にとくに焦点をあてた条約と勧告が採択されたのは51年の総会にお

いてであったのである⁽⁷⁾。

(オ) この男女同一価値労働同一賃金の原則に関する ILO 条約が100号条約として採択されたのは偶然のことではなく、これが極めて重要な条約であるゆえに準備を整え加盟国の十分な理解をも得ながら2回討議のルールに則り、第34回総会においてエポック・メイキングな100号条約として採択されたのである。その結果、この条約は1984年（昭和59年）当時においてすでに105か国によって批准され⁽⁸⁾、わが国はつとに昭和42年にこれを批准したのである。

2 非典型的労働関係と ILO 条約

- (1) (ア) ILO は1919年の1号条約から始まり、1951年のエポック・メイキングな100号条約を経て2011年の189号条約に至るまで実に多数の条約を採択している。しかし、これらの条約の多くは無期労働契約を締結しているフルタイム労働者の労働関係に関する条約であって、有期労働関係やパートタイム労働関係や派遣労働関係のような非典型的労働関係に関する条約は数少なかったのである。ましてや、従属的労働関係ではない非従属的労働関係については皆無に近かったのである⁽⁹⁾。

(イ) ILO は1919年の1号条約から2011年の189号条約に至るまでに189個の条約を採択したが、このうちの150号条約を超える頃からILO条約の中には非典型的労働関係に係わる条約が散見されるようになった。たとえば、1994年の「パートタイム労働に関する条約（175号）」であり、また、派遣労働にも関係する1997年の「民間職業仲介事業所に関する条約（181号）」である⁽¹⁰⁾。そして、この間にあって、1981年には「家庭責任を有する労働者である男女労働者の機会均等及び平等取扱に関する条約（156号）」も採択された⁽¹¹⁾。

- (2) (ア) わが国における労働法上の労働者にしろ労組法上の労働者にしろ、労働者とは一般的に使用者の指揮命令下において労務を提供する者のことと理解される。このことは基本的にはドイツにおける被用者（Arbeitnehmer）に関してもフランスにおける被用者（salarié）に関しても同様であ

り、このうちのドイツにおける被用者は「他人の指揮命令下において」(in der Direktion eines anderen) 労務を提供する者であると理解されている。そして、このような被用者が「職員」(Angestellte) と「労働者」(Arbeiter) に区別されている。このことはフランスにおいても同様であり、被用者は「職員」(employé) と「労働者」(ouvrier) とに区別されている。しかし、フランスにおいてはドイツにおけるような労務提供の従属性を明示する「他人の指揮命令下において」という概念はとくには使用されていない。

(イ) ある労務提供者の労務提供が他人の指揮命令下におけるものであることが明白であれば、その者は労働者として各種の労働保護法による保護を享受することができる。これに対して、このような労務提供の従属性が必ずしも明白でない場合には、単に形式的に判断して労働者でないとするのではなく、諸般の事情を総合評価して労働者であるか否かが実質的に判断されるべきことになる。しかし、この判断は複雑で時間を要するところから、外観的にみて非従属労働と見られるならば形式的に非従属労働と判断して、各種の労働保護法による保護の否定されることが多くなる⁽¹²⁾。

このような意味における外観的・形式的な非従属労働、すなわち、「形式的非従属労働」(形式的独立労働)としては、従来から実際に各種のものが存在していたといえることができる⁽¹³⁾。そして、その典型が「家事労働」すなわち「日常的な家庭生活を営むために必要な各種の労務の提供」であったのである。たとえば、育児・炊事や掃除・洗濯などである。かかる家事労働は、家族(世帯)の一員が他の一員のために行うものであり、しかも、女性が無償で行うことが多いという特徴を有している。しかし、世帯の一員が他の一員のために有償で行うこともあり得、また、世帯の一員が他の世帯の一員のために有償で行うこともありうるのである。

(ウ) かかる家事労働は、育児や炊事にせよ掃除・洗濯にせよ、大掃除のような場合は別にして規模の小さいものであるから、その指揮命令性は顕著なものではなく、また、有償であるとしても一般労働に比較して対価が

低額であるという傾向がみられる。しかも、労働提供の主体が女性であることが多いという傾向もみられる。かかる特徴ないし傾向は家事労働に類似する家内労働（家屋内労働）に関しても見られるものである。

ここにいう家内労働（家屋内労働）とは、一般的には、「問屋・製造業者などから原料や道具などの提供を受けて、自宅で単純な物品の製造・加工などを行ない、その対価として賃金を得る形態の労働のこと」と理解されている⁽¹⁴⁾。また、法律学上の概念としても、以上に類似して、家内労働とは「加工賃を得る目的で、製造業者・問屋あるいは仲介人から提供され又は買い受けた材料をもとに自宅など自己の選択する場所で、単独で又は同居の親族の補助とともに、物品の製造・加工業に従事する労働の形態」であると把握されている⁽¹⁵⁾。

そして、家内労働法は、その2条2項において、家内労働者に関して以下のように規定している。『家内労働者』とは、物品の製造、加工等若しくは販売又はこれらの請負を業とする者その他これらの行為に類似する行為を業とする者であって厚生労働省令で定めるものから、主として労働の対価を得るために、その業務の目的物たる物品……について委託を受けて、物品の製造又は加工等に従事する者であって、その業務について同居の親族以外の者を使用しないことを常態とするものをいう」と⁽¹⁶⁾。

3 家事労働者条約および家事労働者勧告の採択

- (1) (ア) 家事労働は、ILO156号条約である家庭責任平等条約が前提しているように、男女がそれぞれ平等に負担すべきものではあるが、現実的には依然として女性の負担とされることが多く、しかも、家事労働の労働環境は一般労働に比較して良好であるとはいえず、その対価も適切であるとはいえない状況にある。そこで、ILOは、家庭責任平等条約の重要性にも言及してから、2011年に開催された第100回総会（男女同一価値労働同一賃金の原則についての条約は100号条約）において「家事労働者のための適切な労働に関する条約（189号）」を採択したのである。

この条約は、イギリス語によれば、Convention (No189) concerning

Decent Work for domestic Workers というものであり、1条から27条までの27か条からなるものであっていくぶん包括的な内容の条約である。しかも、同月同日（2011年6月16日）に、「家事労働者のための適切な労働に関する勧告（201号）」も採択された。この勧告はイギリス語によれば、Recommendation (No201) concerning Decent Work for Domestic Workers というものであって、1項から26項までの26項目からなっており、条約についてと同様にいくぶん包括的な内容のものになっている。

(イ) この条約はその前文の第3文において「家族的責任」(family responsibilities 家庭責任のこと)に言及した後に、第4文において条約を採択することの重要性に関して以下のように記述している。「家事労働が、依然として過小評価され (undervalued)、及び、軽視されている (invisible) こと、並びに、主として女子 (women and girls 女性および少女のこと) によって行われており、これらの多くが雇用条件及び労働条件 (conditions of employment and of work) についての差別及び〔その〕他の人権侵害 (other abuses of human rights) について特に被害を受けやすい移民又は不利な立場にある地域社会の構成員であることを考慮〔しなければならない〕」と⁽¹⁷⁾。

しかも、これは前文の第5文および第7文において、「歴史的に正式な雇用 (formal employment 正規雇用のこと) の機会が不足している発展途上国において、家事労働者が国内の労働人口の相当な部分 (significant proportion) を構成し、及び引き続き最も疎外されていることを考慮し〔なければならず〕」、また、「移民労働者条約 (改正) (第97号) ……移民労働者 (補足規定) 条約……家庭的責任を有する労働者条約……民間職業仲介事業所条約……の家事労働者に対する特別な関連性〔に留意しなければならない〕」と記述している⁽¹⁸⁾。

(2) (ア) この家事労働者条約は、1条1項 (a) 号において「〔この条約の適用上〕『家事労働』 (domestic work) とは、家庭において又は家庭のために行われる労働をいう」と規定する。ここにいる「この条約の適用上

(for the purpose of this convention) とは、「この条約の意味における」すなわち「この条約にいう」という意味である（フランス語の正文では、aux fins de la presente convention とされている。fin とは目的のこと）が、この文言の本来の意味は「この条約の目的のために」という意味である⁽¹⁹⁾。

また、「家庭において又は家庭のために」(in or for a household or households) とは、「1 または 2 以上の家庭において又は家庭のために」すなわち「1 または 2 以上の世帯において、又は、1 または 2 以上の世帯のために」(au sein de ou pour un ou plusieurs ménages) ということである⁽²⁰⁾。「世帯」(household, ménage, Haushalt) とは、人が社会生活を営むために、自ら単独で（1人世帯）または他の者とともに（2人世帯など）、生活資材を利用して構成する人的共同体のことである。

このような世帯（1 または 2 以上の世帯）においてまたは世帯のために行われる労務提供が、189号条約である家事労働者条約の適用対象たる「家事労働」(domestic work, travail domestique, hauswirtschaftliche Arbeit) とされるのである。したがって、ここにいう「家事労働」は比較的広義の概念であり、通常の日常会話で使用される家事労働概念（日常的な家庭生活を営むために必要な各種の労務の提供のこと）と大差ない概念であるといえることができる。

(イ) 通常の日常会話での「家事労働」としては育児・炊事や掃除・洗濯などがある。そして、これには或る世帯の構成員（世帯員）が他の世帯員のために自発的に無償で行うものもあれば、或る世帯の世帯員が他の世帯の世帯員から依頼されて有償で行うものもある。このような自発的で無償な行為は、法律その他の各種の法規範の規制の対象とするには馴染まないことが多い。そこで、この家事労働者条約も、「家事労働」が雇用関係の枠内にあるものであることを前提にしながら、1条1項 (b) 号において「家事労働者」について「家事労働者 (domestic worker, travailleur domestique, Hausangestellte) とは、雇用関係の下において (within an

employment relationship, dans le cadre d'une relation de travail, in Rahmen eines Arbeitsverhältnisses) 家事労働に従事する者をいう」と規定している。

しかも、この条約は、1条1項(c)号において、「雇用関係の下において」すなわち「労働関係の枠内において」家事労働に従事する者であっても、「随時又は散発的にのみ家事労働を行う者及び職業としてではなく家事労働を行う者は、家事労働者でない」と規定して、このような者を家事労働者の範囲から除外している。これは、随時又は散発的にのみ (only occasionally or sporadically, seulement de manière occasionnelle ou sporadique, nur gelegentlich oder sporadisch) 家事労働を行う者」と、「職業としてではなく」(not on an occupational basis, sans en faire sa profession, nicht berufsmäßig) 家事労働を行う者」という2種類の労務提供者が家事労働者の範囲から除外されるという趣旨ではなく、随時・散発的にのみ家事労働を行い、職業として行っていると認め難い者は家事労働者の範囲からは除外されるという趣旨である⁽²¹⁾。

(ウ) この家事労働者条約は、1条にいう「家事労働者」の概念に該当する限りすべての家事労働者に適用されるが、2条2項(a)号により加盟国は「少なくとも同等の保護が別途与えられる労働者」といえる者については「適用範囲」から除外しうる旨を規定している。「少なくとも同等の保護」(at least equivalent protection) とは同価値以上の保護 (une protection au moins équivalente) のことであり⁽²²⁾、「別途与えられる」(otherwise provided with) とはこの条約による以外の方法で付与されている、ということである。

また、条約は2条2項(b)号によって加盟国が「実質的な性質の特別な問題が生ずる限られた種類の労働者」についても適用範囲から除外しうる旨を規定している。「実質的な性質の特別な問題」(special problems of a substantial nature) とは相当に重要な特別の問題ということである⁽²³⁾。また、「限られた種類の労働者」(limited categories of workers) とは例

えば移民労働者としての家事労働者などのことであり、このような家事労働者について特殊な問題が発生するような場合には、加盟国はその者を条約の適用範囲から除外することができるということである。

(二) 条約を批准する加盟国がこの2種類の家事労働者を条約の適用範囲から除外しうるためには、事前に「最も代表的な使用者団体及び労働者団体」と協議しなければならない。「最も代表的な使用者団体及び労働者団体」(the most representative organizations of employers and workers)とは標準的な使用者団体および標準的な労働者団体(労働組合)のことである⁽²⁴⁾。しかも、かかる労使の標準的な団体のほかに、「家事労働者を代表する団体及び家事労働者の使用者を代表する団体」(organizations representative of domestic workers and those representative of employers of domestic workers)が存在する場合には、加盟国は事前にこれらの団体とも協議しなければならない。

このようにして加盟国は家事労働者を条約の適用範囲から除外することができるが、これも加盟国の「措置」(measure)の一種であるから、加盟国は「各加盟国は、当事者となった条約の規定を実施するために執った措置について、国際労働事務局に年次報告をすることに同意する。この報告は、理事会が要請する様式で作成され、且つ、理事会が要請する細目を記載していなければならない」と規定するILO憲章22条に従ってILO事務局に年次報告をすべきことになる。そして、報告においては、この条約の2条3項に従って「除外された特定の種類の労働者及びその除外の理由」(any particular category of workers thus excluded and the reasons for such exclusion)が明示されるべきことになる。

4 家事労働および家事労働者の特殊性

- (1) (ア) 「家事労働」を日常会話的に「日常的な家庭生活を営むために必要な各種の労務の提供」と概念規定し、このような労務提供を行う主体を「家事労働者」と概念規定すると、今日のわが国の人口総数は1億人を超えると推計されるから、現在のわが国においては膨大な数のかかる家事労働者

働者が存在することになる。ましてや、今日の世界全体の人口総数を47億人と推計するとより一層膨大な数の家事労働者が存在することになる。このことは現在の中国の人口総数を14億人と推計した場合にも類似したことになる。

これに対して、「家事労働者」を「雇用関係の下において」(within an employment relationship) すなわち「労働関係の範囲内において」(dans le cadre d'une relation de travail, im Rahmen eines Arbeitsverhältnisses) 労務を提供する者と理解すると、このような家事労働者は意外に少なく約5300万人と推定され、かかる数の家事労働者が189号条約の適用対象になるとされることになる⁽²⁵⁾。しかし、社会保障の給付がなされていない人々はこれよりはるかに多く約5億人ともいわれている。

(イ) 家事労働者条約が適用される家事労働者は「労働関係の範囲内において」労務を提供する者であるから、労働者一般に関してと同様にこれらの家事労働者についても一般労働法の適用がある。しかし、そのほかに、家事労働に従事する家事労働者には「家事労働の特殊性質」(the special characteristics of domestic work) が考慮されて然るべきであるから⁽²⁶⁾、家事労働者条約は4条1項において「加盟国は……労働全般のために国内法令によって定められた最低年齢を下回らない家事労働者のための最低年齢 (a minimum age for domestic workers)」を定めるべきものとしている。

しかも、この条約は同条2項において「〔加盟国は〕18歳未満の家事労働者であって雇用についての最低年齢を上回るもの〔15歳以上18歳未満の者のこと〕が行う労働が、当該家事労働者から義務教育 (compulsory education) を奪わないこと又はその後の教育〔に参加する機会〕若しくは職業訓練に参加する……機会 (opportunities to participation) を妨げないことを確保するための措置をとる」べきものと規定している。この条約は、その上で、5条において「加盟国は、家事労働者が、あらゆる形態の虐待・嫌がらせ及び暴力 (all forms of abuse, harassment and vio-

lence) に対する実効的な保護を享受することを確保するための措置をとる」ものと規定している。

- (2) (ア) 家事労働者の行う家事労働は労働一般との対比において「特殊な性質」を有する。その1つが、家事労働はそれを行う「世帯」に住込みで行う「住込労働」であることが多いということである。しかし、家事労働者がその意思に反して住込みで家事労働に従事することは、その者の人身の自由を侵害するとともに居住の自由をも侵害するものであるから、家事労働者にそれについての諾否の自由が保障されなければならない。そこで、家事労働者条約は9条1項 (a) 号において「〔家事労働者は〕家事労働を行う世帯に住み込む (reside, etre lage, wohnen) か否かについて、使用者または使用者となり得る者との間で合意に達する〔自由〕」を有しなければならないとされている。

しかも、家事労働者が住込みで家事労働を行う場合には直ちにプライバシーの問題が生ずることになるので、労働条件が適切であるべきことはいうまでもなく、そのほかに「家事労働者のプライバシー (privacy, vie privée, Privatsphäre) を尊重する適切な生活条件」も保障されるべきことになる (家事労働者条約6条)。さらに、家事労働を行う世帯に住み込む家事労働者は「日ごとの、1週間ごとの、休息 (rest, repos, Ruhe) の間において、または、年次休暇 (annual leave, congé annuel, Jahresurlaub) の間において、当該世帯に留まり (remain, rester, bleiben)、または、当該世帯に属する者とともに留まる義務」を負わないことも保障されるべきことになる (同条約9条1項 (b) 号)。

ところで、わが国の江戸時代や明治時代においては、丁稚奉公や女中奉公という制度が広く存在し、このような奉公に擁わる労務提供者は丁稚あるいは女中と呼ばれた。「丁稚」(でっち)とは若年の男性であって主人の家(世帯)に住み込んで家事労働を含む各種の雑事を行う労務提供者のことであり、「女中」とは若年の女性であって同じく主人の家に住み込んで家事労働などを行う労務提供者のことである⁽²⁷⁾。このほかに、これらに

類似する制度として「年季奉公」の制度もあった。これは奉公人が主人の家に住み込んで労務を提供することに関する制度であり、「年季」と呼ばれる期間が満了すると奉公人の労働義務が消滅するというものであった。しかし、これらの家事労働者に関しては休日や年次休暇の制度はなく、「藪入り」という制度があったにすぎなかった⁽²⁸⁾。

(イ) 家事労働という概念は一般的に「日常的な家庭生活を営むために必要な各種の労務の提供」と規定する場合はいうまでもなく、丁稚奉公・女中奉公や年季奉公などとの関連において規定される場合においても、その中には実に様々な種類の労務提供が含まれるものである。そして、このことは、家事労働者条約が適用される家事労働についても同様である。たしかに、この条約の適用対象にされる家事労働は「労働関係の範囲内において行われる労務の提供」に限定されている。しかし、かかる限定にもかかわらず、条約の適用対象たる家事労働の中には実に各種のものが含まれ得るのである。

そこで、家事労働者条約は、7条1項 (d) 号において、家事労働者を保護する目的から、「可能な場合には、国内法令又は団体交渉の合意に基づく書面による契約」により、家事労働者に対して「行うべき労働の種類 (the type of work to be performed, le type de travail à effectuer, die Art der auszuführenden Arbeit) が通知されるべきことを規定している。ここにいう「団体交渉の合意 (collective agreements, conventions collectives, Gesamtarbeitsverträge) とは簡単にいえば「労働協約」のことである。そして、この条約の7条1項はこのほかに「通常の職場の住所」(b号)と「通常の労働時間」(f号)と「年次有給休暇並びに日ごとの及び1週間ごとの休息の時間」(g号)の通知されるべきことをも規定している。

(ウ) 家事労働者条約7条1項 (d) 号が規定する「行うべき労働の種類」は単一のものであることもあれば複数のものであることもある。例えば、育児のみのこともあれば、育児および炊事のこともあれば、育児と炊

事と掃除のこともある。家事労働者はこのような種類の家事労働を「行うべき労働」として「1または2以上の世帯において、または、1または2以上の世帯のために」、多くは書面化された契約書に基づいて行うべきことになる。

自己の自由な意思により住込みの家事労働者になった者であれば、「1の世帯」において契約された家事労働を行うことが一般的であると考えられるが、非住込みの通勤家事労働者であれば「2以上の世帯」において家事労働を行うこともありうると考えられる。例えば、午前中に或る世帯において育児の家事労働に従事するとともに炊事の家事労働にも従事し、午後に他の世帯において掃除の家事労働に従事するとともに洗濯の家事労働にも従事するような場合である。そして、このことは「2以上の世帯のために」家事労働をする場合にもほぼ同様であることになる。

- (3) (ア) 家事労働者条約の適用される家事労働者は「雇用関係の下において」すなわち「労働関係の範囲内において」家事労働を行う者に限られる。このことは縷述したところである。ここにいる「労働関係」とは、一般的に言えば、指揮命令関係と対価支払関係とからなる法律関係である。そして、対価すなわち賃金 (wage) は、1949年のILO95号条約によれば、法貨 (legal tender 通貨のこと) で支払われなければならない、「約束手形、借用証書若しくはクーポンの形式又は法貨に代わるものであるとするその他の形式による支払」すなわち現物による支払は禁止されている⁽²⁹⁾。

ところが、家事労働者条約は、7条1項 (d) 号において、家事労働者に通知 (inform, informer, informieren) されるべき事項として「報酬、計算方法及び支払の周期」(the remuneration, method of calculation and periodicity of payments) に言及しているが、それが「通貨で」(in coin) 支払われるべきことには言及しておらず、かえって家事労働者条約と同日に採択された家事労働者勧告 (Domestic Workers Recommendation) は、通知されるべき追加的事項として6項 (c) 号において「時間外の手当または報償」(pay or compensation for overtime) の率 (rate) に言及し、

(e) 号においては「現物による支払およびその金銭的価値」(any payments in kind and their monetary value)に言及している。したがって、家事労働者の賃金は現物支払いが許容されていると理解すべきことになる。

(イ) 家事労働者が「1の……世帯」において住込みで家事労働に従事し、賃金を僅かな金銭的価値を有するに過ぎない現物で支給される場合においても、家事労働者条約が適用されるべきことになる。このような種類の家事労働者がわが国の明治・大正・昭和の各時代において、「子守」とか「女中」とか「姉や」などの名称のもとに多数存在したことは周知の事実であるが、平成の現代においても「お手伝いさん」という名称のもとに僅かながら存在している。たとえば、女性実業家や女性作家や女優の世帯などにおける家事労働者である。そして、発展途上国においては、賃金労働者の4パーセントないし12パーセントが家事労働者であり、その約83パーセントが女性や少女であるとされている⁽³⁰⁾。

(4) (ア) 外国で労働することを目的にして集団で移住する人々は「移民」と呼ばれることがある。平成の現代では「移住者」と呼ばれることが多くなっているが、この移民という言葉は英語のimmigrantという言葉の発音の感じを残しながら翻訳した言葉といわれている⁽³¹⁾。このような意味における移民は、これを受け入れる側の国からすれば外国人を集団で受け入れることになるから、最近では慎重な対応をする国が増えて来ている。その一例がアメリカである。

アメリカはかつては外国人の集団を積極的に移民として受け入れた。その典型的な事例がイギリスのスコットランド地方のケルト系の人々の集団移住を認めたことであり、また、アフリカの西海岸地方の黒人の人々の移住を認めたことである。しかし、アメリカは国境を接しているメキシコからの移民には慎重で厳格な態度を取っている。これは、メキシコからの不法移民がすでに多数存在するという理由からであるが、他方でテロ事件に関する不安からでもあるとされている⁽³²⁾。

(イ) 移民労働者の問題は外国人労働者問題の一部であるが、個々人の間

題ではなく集団の問題であるところから、一般の外国人労働者問題とは性質の相違する点が多い。そこで、ILO は以前から一般外国人労働者に関する条約ではなく移民労働者に関するいくつかの条約を採択している。第一は、1949年の「移民労働者〈改正〉条約（97号）」であり、この条約は6条1項柱書において「国籍、人種、宗教、性の差別なく」すべての移民労働者に適用がある旨を規定した上で、加盟国が移民労働者の有給休暇や家内労働の制限や労働の最低年齢に関して、自国民よりも不利益に取り扱ってはならない義務を負うことを定めている⁽³³⁾。

第二は、1975年の「劣悪な条件の下にある移住ならびに移民労働者の機会および待遇に関する条約（143号）」であり、この条約は、加盟国が、他の加盟国と協力して、労働を目的とする秘密移民や移民労働者の違法就労を阻止するために必要にして適切なあらゆる措置をとるべき旨を規定し（第1部）、また、移民労働者およびその家族の就労に関する機会平等と平等取扱とを増進し保障すべきことをも規定している（第2部）⁽³⁴⁾。ここにいう「移民労働者の家族」とは、条約の13条によれば、移民労働者の配偶者と扶養義務を有する子と父母のことである。

(ウ) しかも、この143号条約が採択された1979年から約35年が経過した2011年に至り、ILO は第100回総会において継述してきた189号条約を採択した。この条約は、8条1項において、「国内法令は、いずれかの国における家事労働のために他の国において募集される移民である家事労働者が、書面による採用通知又は当該家事労働が行われる国においてその実施を確保すべき雇用契約で前条に定める雇用条件を含むものを、当該採用通知又は当該雇用契約が適用される家事労働に就くことを目的として国境を越える前に、受け取ることを要求する」と規定している。ここにいう「国内法令（national laws and regulations）は……要求する」とは、国内法令で規定しなければならないという意味である。

そして、「国内法令は……他の国において募集される移民である家事労働者が、書面による採用通知又は当該家事労働が行われる国においてその

実施を確保すべき雇用契約 (contract of employment) で前条に定める雇用条件 (terms and conditions) を含むものを、当該採用通知又は当該雇用契約 (the offer or contract) が適用される家事労働に就くことを目的として国境を越える前に、受け取ることを要求する」とは、他の国において家事労働をするために募集 (recruter) される家事労働者は、雇用申込 (offre d'emploi 求人申込のこと。採用通知ではない) または労働契約 (contrat de travail) の書面を国境を越える前に受領できなければならない、この書面には前条の7条に列挙されている各種の雇用条件 (les conditions d'emploi) が明示されていなければならない、ということ在国内法令で規定しなければならない、という意味である。

このほかに、この条約は、8条4項において「加盟国は、法令その他の措置 (other mesures, autres mesures, andere Maßnahmen) による手段によって、移民である家事労働者が募集された雇用契約の期間満了 (expiry) 又は終了 (termination) により送還 (repatriation) の権利を有する条件について明らかにする」と規定している。ここにいう「終了」とは解雇や辞職をも含む概念であり、「送還」とは本国への帰還のことであり、「明らかにする」とは決定しなければならないということである⁽³⁵⁾。

- (5) (ア) 世帯の構成員が日常的な家庭生活を営むために各種の労務提供を行う場合に、その前提として世帯における家庭生活が円滑に営まれるための「生活手段」(食料や、金銭や、金銭に代るもの) が十分に存在することが必要になる。このうち金銭に代るものとしてのクーポン券などの「金券」は、地域社会内においては通用力を有するものの、一般的には通用力がないものであるから、1949年のILO95号条約によって禁止されたものである⁽³⁶⁾。

このような食糧・金銭・金銭に代るものなどの生活手段は、一般的には人々の「生業活動」の結果として取得されるものである。そして、「生業」としてはわが国で古くから農業・漁業や養蚕業や畜産業などが行われ、このことは長野県(信濃国)においても同様であったが、農業については縄

文時代には「農耕」は行われていなかったとする学説が従来は有力であった。ところが、昭和35年ごろから長野県諏訪郡富士見町の「井戸尻遺跡」（いどじりいせき）で多数の縄文土器が発掘され、八ヶ岳南麓の海拔800メートル地帯においても常畑（じょうばた）が開墾され、雑穀の栽培が行われていたこと（縄文農耕。農耕とは土地を耕作して家庭生活の基礎になる食用植物を栽培すること）が明らかにされるに至ったのである⁽³⁷⁾。

また、漁業に関しては、わが国では古くから内陸漁業と海洋漁業とが行われていたが、海に面していない信濃国での漁業は諏訪湖などの湖池沼における漁業であり、あるいは、信濃川などの河川によるものであった⁽³⁸⁾。この河川による漁業は「河川漁撈」（かせんぎょうろう）とも呼ばれ、信濃川での縄文時代におけるサケの「漁撈」は今日において人々が想像する以上にはるかに大規模であったのではないかといわれている。このことは東京都の多摩川におけるサケの漁撈についても同様であるといつてよい。

さらに、信濃国では養蚕業も生業の1つとして行われた。養蚕業は農業の一部としての桑木の栽培と密接に関係しており、すでに奈良時代においても信濃国では農業と並んで養蚕業が営まれていたとされる。そして、時代が下って江戸時代になると、天龍川沿いの川岸村周辺において大量に生産された生糸が諏訪湖畔の岡谷村に集荷され、上田を通り碓氷峠を越えて江戸にまで出荷されたと考えられている。しかも、時代がさらに下って明治時代に入ると、群馬県高崎市に近い富岡の地に最新技術による官営の富岡製糸場が設立されたことにより、ここで大量生産された絹糸や絹布が八王子を経て横浜港にまで運搬されることになったのである⁽³⁹⁾。

(イ) 畜産業も農業との関連性が深いが、わが国において馬の畜産が行われるようになったのは西暦5世紀ごろからであり、信濃国において牧が開設されるようになったのもほぼこの頃からであるといわれている。「牧」の本来の意味は「馬（ま）城（き）」という意味であるが、一般的には馬に限らず牛をも含めて家畜を放飼いにする場所が牧と呼ばれている⁽⁴⁰⁾。しかし、家畜には様ざまなものがあつ、豚も鶏も犬も家畜の一種であるが、

これらの動物を放飼いにする場合は通常は放牧とはいわない⁽⁴¹⁾。そして、牛や馬の放牧は牛馬を放飼いにするものであるから、この場合には牛馬の飼料である牧草を刈り取る必要はあまりないことになる。しかし、これを刈り取ると、それは秣（まぐさ。馬草の意味。牛についても馬草という）と呼ばれることになり、このような秣を刈り取る原野は「まぐさ場」あるいは「まぐさ地」と呼ばれる⁽⁴²⁾。

(ウ) わが国における林業は第2次大戦前においてかなり盛んに営まれ、各地で杉や檜や松などの用材（土木用材や建築用材や家具用材など）が生産されていた。その後、第2次大戦中は国家による自由経済の規制（統制経済）のために一時的に衰退したが、大戦の終了後に林業は再び隆盛になった。杉に関していえば、秋田県の米代川（よねしろがわ）流域において秋田杉が生産され、檜に関していえば、長野県の本川流域において本川檜が生産された。また、愛知県の本川流域においても尾州檜（びしゅうひのき）が生産された。

これに対して、松に関しては事情が相違し、松については杉や檜と違って大規模な生産地がなく、長野県や千葉県などの各地に中規模や小規模の生産地が点在するに過ぎなかった⁽⁴³⁾。そのために、松の用材とくに土木用材が不足し、すでに第2次大戦前においてアメリカから米松（ベイマツ）が輸入されていた。ところが、昭和40年代後半からわが国の経済が高度成長期に入るに及んで事態が一変し、杉の用材としては機械で薄く削った杉板をベニヤの合板に接着したものが使われるようになり、檜の用材としては台湾檜や北海檜（北海檜は本来の檜ではないといわれる）や米榎（ベイツガ）などが使われるようになり、松の用材としては戦前・戦後と同様に米松が使われ、また、米榎（松と同じように樹脂分が多い）も使われるようになったのである⁽⁴⁴⁾。

(6) (ア) わが国においては、生業として農業や漁業や養蚕業などが行れ、これらの生業は規模・形態・方法などを変えながら今日に至っている。この間にあって、社会の構成員が行う生業として、従属労働にかかわる生業も

増えている。とりわけ、第3次産業における労働生活（労働者生活）としての生業である。そして、社会の構成員は、農業・漁業・養蚕業や労働生活（サラリーマン生活やOL生活）などによって取得した生活手段である食糧・金銭・金銭に代わるものなどによって世帯における家庭生活を営むことになり、このような家庭生活に当って世帯主や世帯員は様々な家事労働を行っている。

世帯主や世帯員が行う家事労働は、大別して2つに分類することができる。第一は、これらの者が自ら自主的に行う家事労働であり、第二は他人から依頼されその委託に応じて行う家事労働である。例えば、「育児」であれば、世帯主が自ら自主的に行う育児であり、あるいは、世帯員が他人（世帯主も含む）から依頼されその委託に応じて行う育児である。このことは、或る世帯の世帯員等が他の世帯の世帯員等から委託された場合にも基本的には同様である。そして、このようなことは古く縄文時代における育児という家事労働についても基本的には同じであったと想像されるのである⁽⁴⁵⁾。

また、「炊事」という家事労働も世帯主や世帯員が自ら自主的にまたは他人から依頼されて行い、これも古く縄文時代から行われていたと考えられるが、弥生時代に入った5世紀ごろにわが国に炊事道具として竈（かまど）が伝来した後においては、炊事方法が大きく変化し多様な料理が可能になり、とくに竈と甗（こしき）を併用することによって米や豆の蒸し料理が可能になったとされる。これは、甗という炊事道具の底には小穴が数個あいており、ここから湯気を通すことが出来たからであるという。そして、炊事という家事労働は、炊事方法の変化により多様な料理が可能になったところから、女性の世帯員が自主的に行うことが多くなり、これに伴って用水一般を女性の世帯員が管理するようになったと考えられている。

(イ) 縄文時代におけるせよ弥生時代におけるにせよ、炊事のための用水や洗濯のための用水はともに河川や湖池沼や井戸から汲んだ水であり、それを用途に応じて一部は炊事用水として使用し残部は洗濯用水として使用

したものと考えられている。例えば、長野県の諏訪地方の富士見町周辺では、縄文時代において水量の豊富な井戸から汲み上げた水の一部が調理用水として使用され残部が洗濯用水として使用されたと考えられている。また、東京都町田市の多摩丘陵の地域では、縄文時代におけるとともに弥生時代においても、多摩川の水や多摩川の伏流水による自然湧水池から流れ出る中小河川の水を汲んで調理用水とともに洗濯用水としても使用し、あるいは、このような大中小河川において洗濯をしたとも考えられている⁽⁴⁶⁾。

(ウ) わが国では、古くから「日常的な家庭生活を営むために必要な各種の労務の提供をする者」という意味の家事労働者が多数存在していた。また、それは明治・大正・昭和の各時代においても存在し、平成の現代においても多数存在している。ところが、この平成の現代におけるかかる家事労働者のすべてが「家事労働者条約」あるいは「家事労働者勧告」にいう「家事労働者」(domestic workers) になり、家事労働者条約等による保護を享受するというにはならないのである。

そのためには、労務提供者が「雇用関係の下において家事労働に従事する者」(person engaged in domestic work within an employment relationship) すなわち「労働関係の範囲内において家事労働を行う……者」(personne……executant un travail domestique dans le cadre d'une relation de travail) でなければならないのである⁽⁴⁷⁾。このような者であれば、労務提供者の性別も国籍も年齢も問わないということになる。しかし、現実的には、このような概念に該当する労務提供者は、女性であり外国人であり若年者であることが多いのである。

ところが、家事労働者条約は、1条1項(c)号において、かかる労務提供者であっても「随時又は散発的にのみ家事労働を行う者及び職業としてではなく家事労働を行う者は、家事労働者ではない」(Person who performs domestic work only occasionally or sporadically and not on an occupational basis is not a domestic worker.) と規定している。すなわ

ち家事労働を「随時または散発的にのみ行う者」であって、それを職業とする者でないものは家事労働者ではないとされるのである⁽⁴⁸⁾。

(㏽) これらのことに関連して、平成の現代のわが国における現状を前提にし、性別・国籍・年齢などを問うことなく「日常的な家庭生活を営むために必要な各種の労務を提供する者」の員数を想定してみると、それはきわめて多数のものになると推定れる。たとえば、これらの者の中には、育児を行う夫が含まれ、炊事をする祖母が含まれ、掃除をする男女の子供なども含まれることになるからである。あるいは、夫や妻の両親を介護するために訪問するケア・ヘルパーなども含まれるからである。さらには、近隣の主婦が一時的に依頼されて衣類の洗濯などをすることもありうる。

しかし、このような家事労働と家事労働者条約等との関係を考察してみると、これらの家事労働のすべてが条約や勧告上の家事労働に該当するものではなく、したがって、かかる家事労働を行うすべての者が条約上の家事労働者になるわけではない。これらのうちのケア・ヘルパーは条約等の家事労働者（通勤家事労働者）に含まれると考えられるが、衣類を依頼されて時折洗濯する近隣の主婦は「家事労働を随時または散発的にのみ行う者」であるから条約等という家事労働者ではなく、育児や炊事をする夫や祖母等も「職業的に行うもの」ではないから同じく「家事労働者」ではないことになる。

今日の時点において世界的に見たときに、家事労働者は既述したように約5300万人以上存在すると推計されている⁽⁴⁹⁾。この中にはわが国における家事労働者であって家事労働者条約等の適用可能な者も含まれていると考えられる。しかし、住込家事労働者にせよ通勤家事労働者にせよ、日本国籍を有する者であって条約等の家事労働者に該当する者はきわめて少ないと考えられる。このことはドイツ人やフランス人やイギリス人についても同様と思われる。したがって、約5300万人以上と推計される「家事労働者」は多くが発展途上国の国籍を有する家事労働者であると推定されるのである。そして、家事労働者条約を最初に批准した国は南米のウルグアイ

共和国であったのである⁽⁵⁰⁾。

V おわりに

- (1) わが国は国民の外国への移民ないし移住に関して南アメリカのいくつかの国と個別的な移民（移住）協定を締結している。たとえば、パラグアイでありアルゼンチンでありブラジルである。他方で、ILO は、わが国がこれらの国々と個別協定を締結するよりも早く、総会でいくつかの移民条約や移民勧告を採択している。たとえば、1949年の移民労働者〈改正〉条約である。そして、その後に、1975年には「劣悪な条件のもとにある移住ならびに移民労働者の機会及び待遇の均等の促進に関する条約（143号）」を採択している。

そして、ILO は、これからさらに約35年を経過した2011年には、移民（移住者）にも言及しながら「家事労働者条約（189号）」と「家事労働者勧告（201号）」とを採択し、この条約の最初の批准国として南米のウルグアイ共和国が批准した。このウルグアイ共和国という国はガット（GATT General Agreement on Tariffs and Trade）との関係においてよく知られる国であり、また、大草原のパンパスにおける牧畜（羊や牛や豚などの飼育）でも知られる国である。このパンパスは肥沃な平原であり、小麦栽培などの農業にも適していると言われている。

- (2) ウルグアイがガットとの関係においてわが国で知られるようになったのは、1947年にスイスのジュネーブで締結された「ガット協定」に基づき、必要に応じて開催されることになった会議に関係するものである。この会議は会期を定めて開催され、1986年から1993年までの会期は開始の宣言がウルグアイのプンタ・デル・エステ（Punta del Este 東の岬という意味の地名）で行われたところから、「ウルグアイ・ラウンド」と呼ばれている。そして、1974年から1975年までの会期は東京ラウンドと呼ばれている。

このウルグアイ・ラウンドはわが国とアメリカとのイニシャティブの下で開催された会期であり、農業問題などのそれまで議論されて来なかった

主要事項がこのラウンドで交渉の対象にされたが、何よりも大きな成果は世界貿易機関（World Trade Organization WTO と略称）の設立が決議されたことであった。そして、このような成果のほかに、このラウンドではいくつかの個別的な WTO 協定の締結もなされた。その協定の一つが「農業に関する協定」であり、これによって農産物の輸入制限廃止とそれに伴う関税制度の導入が合意された。しかし、わが国の米の輸入に関しては例外が設けられた。

- (3) 「米」はわが国の人々にとっては弥生時代から特別な意味をもち、生業の対象として重要なものであるとともに家庭生活においても無くてはならないものであった。しかし、米の収穫量はそれほど多くはなく、同じく穀類である粟や稗や黍（きび）などの雑穀とともに炊事されることが多かった。わが国でも小麦などの麦類は奈良時代においてすでに存在したとされるが、これはきわめて貴重な食料であったといわれている。

麦としては小麦が最も貴重とされるが、小麦のほかにも大麦やライ麦やオート麦などがあり、これらのうちの小麦は西アジア原産とされ、大麦とほぼ同じ高さに成育するが、大麦よりも環境が良くない土地でも成育するところから世界名地で栽培されているといわれる。そして、ウルグアイのパンパスでもトウモロコシと並んで小麦が栽培されている。このような畜産国でもあり農業国でもあるウルグアイが ILO189号条約を最初の批准国として批准したのである。

- (4) わが国は近代化した工業国であるが「米」の栽培を中心とした農業国でもあり、また、マグロやカツオを好んで捕獲する漁業国でもある。このような生業形態は弥生時代ごろから今日に至るまで基本的には変りがない。このような近代化した工業国が農業国でもあると把握されることは、ヨーロッパの工業国であるイタリアやフランスに関しても同様であり、このことは世界最大の工業国であるアメリカについても同様である。

これらのうちのイタリアについていえば、イタリアは自動車産業が発達しているとともに米（イタリア米）やブドウ（イタリアワイン）やオリー

ブなどの農業も盛んである。また、フランスについていえば、フランスは自動車産業や航空機製造産業が発達しているとともに、小麦やブドウ（フランスワイン。ブルゴーニュワイン・シャンパン・蒸留酒としてのコニャックなど）やトウモロコシなどの農業も盛んである。そして、アメリカも小麦や米（カリフォルニア米）やトウモロコシなどの農業が盛んである。

わが国を初めとして、近代化した工業国であるとともに農業国でもある国々においても、いうまでもなく家事労働者（非職業的家事労働者）は多数存在するが、工業や商業や農業における雇用の機会が広く認められるところから、一般的には職業的家事労働者は少ないと考えられる。これに対して、近代化した工業国ではない農業国や畜産国においては雇用の機会があまり広くは見られず、そのために職業的家事労働者が少なからず存在していると考えられる。ウルグアイ共和国がILO189号条約を最初に批准した背景にはこのような事情があったものと想像される。

注

- (1) 小西・国際労働法62頁。
- (2) 菊地勇夫「国際労働法」労働法講座7巻〈上〉175頁以下参照。
- (3) サンフランシスコ平和条約の調印についてのわが国の全権大使は当時の吉田茂内閣総理大臣であり、この条約と同時に日米安全保障条約も調印された。わが国がこれらの2つの国交条約を「批准」したのは約2か月後の11月である。さらに、それから約半年後の1952年（昭和27年）4月に、この日米安保条約に基づき日米行政協定（正式名称は、日米安全保障条約第3条に基づく行政協定）も調印されたのである。そして、この日米行政協定は、1960年の日米安保条約の改正に伴って日米地位協定になった。
- (4) ILO第2回総会はイタリアのジェヌアで開催され、スイスのジュネーブで開催されるようになったのは第3回総会以降のことである。
- (5) この1号条約は、9条において日本に関する特例条項を規定し、15歳以上の労働者については1週57時間までは労働させ得ることを定めていた。なお、日本以外にも、インド・中国・ベルシャ等の6か国についても特例条項が規定された。小西・前掲書227頁以下参照。
- (6) ニコラス＝バルティコス・国際労働基準とILO〈花見忠監修〉261頁。
- (7) ニコラス＝バルティコス・前掲書261頁。
- (8) ニコラス＝バルティコス・前掲書261頁参照。

- (9) Vgl. Wolfgang Däubler-Michael Kittner-Klaus Lörcher, Internationale Arbeits- und Sozialordnung, S. 22.

ここにおいて、ドイブラー教授等は「〔ILO 条約などの〕国際労働法は 2 つの領域〔個別的労働法と集団的労働法のこと〕において多かれ少なかれなお初期の段階にある」と指摘した上でさらに次のように述べている。

「そのうちの一方〔個別的労働法のこと〕に関していえば、非典型的労働関係（期間の付与・固定的なパートタイム労働および特にフレキシブルなパートタイム労働・賃金労働・形式的な非従属性）は、なお規律の対象になっていないのである」と。

- (10) この ILO181 号条約は、異例であるが 2 回討議ではなく 1 回討議で採択された条約である。
- (11) 1979 年の第 34 回国連総会（ILO 総会ではない）で採択された「女子差別撤廃条約」の前文でも、「子の養育には男女及び社会全体が必要であることを認識〔すべきである〕」と言及されるとともに、「社会及び家庭における男子の伝統的役割を女子の役割とともに変更することが男女の完全な平等の達成に必要なことを〔認識すべきである〕」と指摘されていた。
- (12) 自営農としての労働は言うまでもなく非従属労働であるが、小作農の労働も同様に非従属労働であることが多い。ところが、小作農家の家族がともに農業に従事する場合には、その労働が非従属労働であるのか従属労働であるのかは外観的・形式的には判断の困難なことがある。そして、小作農家の家族が従事する農業労働も、形式的・非従属労働の一種かそれに近いものと判断されることがある。
- (13) ドイブラー教授らが指摘する「期間の付与・固定的なパートタイム労働および特にフレキシブルなパートタイム労働・賃金労働〔派遣労働のこと〕・形式的な非従属性」は ILO 条約の規律の対象になっていない、と言われる場合の「形式的な非従属性」とはかかる意味における概念であると理解することができる。
- (14) 松村明・大辞林〈第 3 版〉498 頁参照。
- (15) 竹内昭夫＝松尾活也＝塩野宏・新法律学辞典〈第 3 版〉159 頁。
- (16) この家内労働法は目的を定める 1 条から罰則を定める 36 条までの分量の少ない法律であるが、その内容はきわめて理解の困難なものが多いのである。
- (17) この条約は、ドイツ語訳では、Übereinkommen über menschenwürdige Arbeit für Hausangestellte というものであり、decent work は menschenwürdige Arbeit と翻訳されている。

menschenwürdig とは「人たるに値する」という意味であり、ワイマール憲法 151 条 1 項 1 文の「経済生活の秩序は、すべての者に人たるに値する生活（menschenwürdiges Dasein）を保障する目的をもつ、正義の原則に適合しなければならない」という条文においても用いられている。この訳文は高木八尺＝末延三次＝宮沢俊義・人権宣言集 212 頁（山田晟訳出部分）による。

- (18) 基本的には ILO 駐日事務所の「日本語訳文（案）」による。
- (19) ドイツ語訳では、im Sinne dieses Übereinkommens（この条約の意味における）とされている。

- (20) ドイツ語訳では, in einem oder mehreren Haushalten oder für einen oder mehrere Haushalte とされている。
- (21) フランス語の正文における, seulement de manière occasionelle ou sporadique sans en faire sa profession とは, 「自己の職業とすることなく, 単に時折のまたは散発的な態様において」という意味である。
- また, ドイツ語訳における nur gelegentlich oder sporadisch und nicht berufsmäßig とは, 「単に時折にまたは散発的に行き, 職業的には行っていない」という意味である。
- (22) ドイツ語訳では ein mindestens gleichwertiger Schutz とされている。
- (23) ドイツ語訳では besondere Probleme von erhebliche Bedeutung とされている。
- (24) ドイツ語訳では die maßgebende Verbände der Arbeitgeber und der Arbeitnehmer とされている。
- (25) ILO 駐日事務所・「最新情報・お知らせ」2012年6月14日発表ILO12/60参照。
- (26) 「家事労働の特殊な性質」という概念については, 10条1項において規定されている。
- (27) 丁稚とは松村・前掲書1730頁によれば「弟子」に由来する言葉のようであり, 服部字之吉=小柳司気太・改訂増補詳解漢和大事典455頁によれば「女中」とは邦語(和製漢字)のようである。
- (28) 「藪入り」については, 小西・前掲書244頁以下参照。
- (29) 小西・前掲書178頁。
- (30) ILO 前掲最近情報・お知らせ参照。
- (31) 移民のほかに, 発音の感じを残しながら日本語に翻訳した言葉としては, 簿記(book-keeping)や証券(securities)などがあると言われている。なお, 銀行はポルトガル語の banco の翻訳ではないかとされている。
- (32) メキシコと国境を接するアメリカ合衆国の州はアリゾナ州とニューメキシコ州とテキサス州の3州であるが, このうちの1つであるアリゾナ州は2010年4月23日に州法としての移民法を制定した。しかし, アリゾナ州の連邦地方裁判所はこの州法の施行直前に主要部分の施行を差し止めたという。現代用語の基礎知識(2012)316頁参照。
- (33) ニコラス・バルティコス・前掲書313頁参照。
- (34) ニコラス・バルティコス・前掲書314頁参照。
- (35) 「法令その他の措置」とは「法令または他の措置」という意味であり, 法令も措置の一種である。そして, 「明らかにする」とはフランス語の正文では déterminer と表現されている。
- (36) 小西・前掲書178頁。
- (37) 井戸尻考古館ホームページ参照。

この井戸尻考古館の最寄駅は JR 中央東線の信濃境駅であり, タクシー便もあるが徒歩で約15分である。

この遺跡からはサケ類の骨が多数検出されており, 「秋に一斉に川を遡上するサケ類を集中捕獲するようになったことがわかる」と言われている。石川日出志・農耕社

会の成立28頁参照。

- (38) 諏訪湖周辺の河川と八ヶ岳周辺の河川とでは対照的な相違があり、諏訪湖周辺の放射状の河川からは河水が諏訪湖に向けて流入しているが、八ヶ岳周辺の放射状の河川からは河水が南麓に向けて流出しているのである。このような八ヶ岳周辺の河川の一つに「立場川」があり、立場川の西北側が「西麓」（さいろく）と呼ばれ、南東側が「南麓」（なんろく）と呼ばれている。
- (39) 富岡製糸場は木骨レンガ造りの建物であり、上信電鉄の上州富岡駅の近くに位置している。この製糸場は官営であり、蚕を生産するだけでなく蚕の優良品種の開発にも力を注いだという。絹糸や絹織物の生産には清涼な淡水が多量に必要とされ、富岡製糸場の南側には大量の清水を得られる中小河川（鎭川 かぶらがわ）が流れている。
- (40) 「牧」という漢字の偏（へん。漢字を構成している左側の部分。右側の構成部分は旁〈つくり〉と呼ばれる）は「牛」のことである。
- (41) 「鶏」という漢字は「雞」（けい）と同じ意味の漢字であり、「雞口となるも、牛後となるなかれ」という場合には「雞口」と表記される。

牧羊という漢字は正規の中国漢字であるが、牧豚とは言わないようである。これに對して、「牧田」という中国漢字があり、これは馬・牛・羊・雞・犬・豚の6畜を飼育する場所を意味するという。簡野道明・増補字源1208頁参照。

なお、沖縄県八重山諸島の北方に位置する尖閣諸島（主島は魚釣島。魚釣台とも呼ばれる）を巡る日中の政治問題に関連して、中国人の中に「日本人よ。富士山で豚を放牧せよ」というスローガンを掲げた者がいたという。

- (42) 学校の校地内に玉川池と奈良池という2つの自然湧水池があることで知られる学校法人・玉川学園は、小田急電鉄の玉川学園前駅の近くに位置しているが、この駅が存在する地域は明治時代になる前は「芝生」（しばお。玉川学園前駅の2つ隣の駅は「柿生」で「かきお」と読む）と呼ばれ、本町田村の所有する「秣地」すなわち「秣地」であったという。

それは、この地域において牛馬とりわけ馬の飼育が行われていたということではなく、八王子から「絹の道」と呼ばれる街道を利用して横浜港まで絹糸や絹織物を人馬で輸送する場合に、そのほぼ中間地点に町田村があり、そこで多くの馬が休息するところから多量の「秣」が必要になり、かかる秣を刈り取る場所が「秣地」としての「芝生」であったと考えられている。玉川学園商店会・玉川学園まちなりたち（パンフレット）による。

- (43) 松茸は赤松の木の根元に生えるので、戦前・戦後において長野県産や千葉県産の松茸が東京でも流通していた。そして、平成の現代においても長野県の別所温泉付近では良質な松茸が収穫されるといわれているが、平成24年是不作であったという。
- (44) 台湾檜は紅檜（ベニヒノキ）とも呼ばれ、また、台檜（タイヒ）とも略称される。
- (45) 育児はbaby careと呼ばれ、あるいは、child careと呼ばれる。これに對して、老人介護はcare for the agedと呼ばれる。わが国の縄文時代においてbaby careとしての育児が行われていたことは疑問の余地がないが、care for the agedが縄文時代においてどのように行われていたかは不明であり、特にcare for the hag（hagとは

老婆のこと)がどのようなものであったかは不明である。わが国では古くから棄老伝説が各地において存在するからである。

長野県の姨捨山(冠着山。かむりきやま)についても棄老伝説が言い伝えられているが真偽のほどは明らかではない。冠着山は JR 篠ノ井線の姨捨駅から見える1252メートルの小高い山岳である。菅原孝標女(すがわらの・たかすえのむすめ)が更級日記中に書いた「わが心 なぐさめかねつ更科や 姨捨山に照る月を見て」という和歌は冠着山を見て詠んだ歌といわれている。

- (46) JR 中央東線の駅の一つに立川駅があり、立川駅の周辺はかつては「立川河原」(たちかわ・がわら)と呼ばれ、この地域は現在よりも多摩川に近接していたと考えられている。なお、JR 南武線の多摩川に近い駅としては「分倍河原」(ぶばい・がわら)という駅もある。
- (47) ドイツ語訳では、Person, die im Rahmen eines Arbeitsverhältnisses hauswirtschaftliche Arbeit verrichtet (労働関係の枠内において家事労働を行う者)とされている。
- (48) ドイツ語訳では、Eine Person, die hauswirtschaftliche Arbeit nur gelegentlich oder sporadisch und nicht berufsmäßig verrichtet, ist kein Hausangestellter. (家事労働を単に時折にまたは散発的にを行い、これを職業的に行うものでない者は、何ら家事労働者ではない。)とされている。
- (49) このことについては、前掲注(30)を参照。
- (50) ウルグアイ共和国は、当初はスペイン領であったが、1828年にブラジル領から独立した共和国であり、人口は約350万人で人種はスペイン系とイタリア系の白人である。松村・前掲書250頁。

また、ウルグアイと国境を接しているパラグアイ共和国は、ウルグアイと相違してスペイン領から独立した国であり、人口は約620万人であるが、人種はメスティゾ(インディオと、スペイン系あるいはポルトガル系の人種との混血)である。松村・前掲書2072頁。

さらに、ウルグアイともパラグアイとも国境を接するアルゼンチン共和国はパラグアイと同様にスペイン領から独立した国であり、人口はウルグアイ・パラグアイと比較して3870万人ときわめて多く、人種はスペイン系とイタリア系の白人が大部分である。松村・前掲書90頁。